

## 5 「反共国民」として生きる

### —4人の日記を通じてみた1970年代韓国大衆の政治意識—

イ ソン スン  
李 松 順

#### 1. はじめに

1972年、「7・4南北共同声明」の歓呼と期待感も束の間、朴正熙<sup>パクチヨンヒ</sup>大統領は10月17日、全国に非常戒厳を敷き、「平和統一という民族の念願を具現するため……約2ヵ月間、憲法の一部条項の効力を停止する非常措置」を布告した<sup>1</sup>。維新体制のはじまりである。

本稿では、この時代を生きた韓国の国民の政治意識と冷戦体制下での反共意識を、日記の分析を通じて考察する。1960～70年代の18年間にわたる朴正熙時代については、すでに多くの研究がある。かれとその時代に対する評価は現在進行形であり、いまだに韓国社会に相当な影響力があるだけに、賛辞と批判双方の研究がつづいている。この時代の執権層がかかげたキーワードとしては、「祖国近代化」、「維新」、「政治安定」、「韓国の民主主義」、「民族主義」、「平和統一」、「反共」、「総力安保」、「セマウル運動」などをあげることができる。

朴正熙時代の政治社会的な性格については、「開発独裁」<sup>2</sup>や「開発動員

---

※ 本文および脚注における〔 〕は訳者注記。

<sup>1</sup> 『경향신문』 1972. 10. 18. “전국에 비상계엄 선포”

<sup>2</sup> 이병천 『개발독재와 박정희시대 : 우리시대의 정치경제적 기원』 창비, 2003.

体制<sup>3</sup>とまとめた研究、朴正熙の統治理念と民主主義、民族主義の関係を分析した研究<sup>4</sup>、維新体制の大衆動員のイデオロギーと機制にかんする研究<sup>5</sup>などがある。社会的には依然として「朴正熙神話」が横行しているが、学問的な研究においては、朴正熙の長期執権と独裁体制は、民主主義の圧殺と歪曲を国粋主義的な民族主義によって合理化したということのほか、経済成長を前面におし出した集団的動員や、労働に対する価値の歪曲、そして北朝鮮を国家共同体破壊の主犯とみなし、これを核とする共産主義に対抗するのだという反共理念を基盤にすえていたということがあきらかにされている。

なかでも、朴正熙の統治の核をなす機制は、反共であった。大韓民国政府の樹立以降、反共は国家存立の絶対的な理由であり、そのアイデンティティとなった。朝鮮戦争以後、李承晩政權期には、いわゆる「国民づくり (nation building)」の物差しとして、反共が必須の機制になったが、5・16軍事クーデターのおもな大義名分も反共であった。反共は、朴正熙政權でいつも伝家の宝刀のごとく活用され、政治的な独裁体制と国民の統制・抑圧を正当化した。このような点にかんする韓国の反共主義の研究も、かなり進んでいる<sup>6</sup>。

- 
- 3 조희연 『동원된 근대화: 박정희 개발동원체제의 정치사회적 이중성』 후마니타스, 2010.
- 4 전제호 『반동적 근대주의자 박정희』 책세상, 2000; 강정인 「박정희 대통령의 민주주의 담론 분석: “행정적”·“민족적”·“한국적” 민주주의를 중심으로」 『철학논집』 27, 2011; 강정인 「박정희 대통령의 민족주의 담론: 민족과 국가의 강고한 결합에 기초한 반공·근대화 민족주의 담론」 『사회과학연구』 20(2), 2012; 강정인·하상복 「박정희의 정치사상: 반자유주의적 근대화 보수주의」 『현대정치연구』 5(1), 2012; 김지형 「1960~70년대 박정희 통치이념의 변용과 지속」 『민주주의와 인권』 13(2), 2013.
- 5 신병식 「박정희시대의 일상생활과 군사주의」 『경제와 사회』 72, 2006; 황병주 「유신체제의 대중인식과 동원담론」 『상허학보』 32, 2011; 배성인 「유신체제의 지배이데올로기와 대중 통제」 『유신을 말하다』 나람북스, 2013.
- 6 김혜진 「박정희정권기 반공이데올로기의 정치경제적 기능」 『역사비평』 16, 1992; 김정훈·조희연 「지배담론으로서의 반공주의와 그 변화: 반공규율사회의 변화를 중심으로」 『한국의 정치사회적 지배담론과 민주주의 동학』 함께읽는책, 2003; 후지이 다케시 「4・

本稿では、1970年代の朴正熙による長期執権体制である維新体制を生き  
た一般大衆、「小さき人びと」の時代認識を、かれらがつづった日記を通  
じてみていく。社会の進歩を追求し、民主主義にめざめた知識人、学生、  
都市の中産層や労働者たちの政治認識と活動があった一方で、それよりも  
多くの資本家、公職者、中産層、農民、労働者、貧民たちは、経済成長の  
経験と戦争のトラウマによって身体化された反共の感性のもとで、政治・  
社会の安定と近代化、経済発展というキャッチフレーズに「受動的合意」  
をしていた。

近代において「日記を書く」ということ、そして書かれた「日記を読む」  
ということについての西川祐子の研究<sup>8</sup>は、よく似た伝統と帝国・植民地  
の関係のなかで近代を形成した日本と韓国における日記研究に、多くの示

---

19/5・16 시기 반공체제 재편과 그 논리- 반공법의 등장과 그 담지자들 『역사문제연구』  
25, 2011; 이하나 「유신체제 성립기 '반공' 논리의 변호와 냉전의 감각」 『역사문제연구』  
32, 2014; 허은 「동아시아 냉전의 연쇄와 박정희정부의 '대공새마을' 건설」 『역사비평』  
111, 2015; 박태균 「1960년대 반공 이데올로기의 진화」 『반공의 시대, 한국과 독일 냉전  
의 정치』 돌베개, 2015.

<sup>7</sup> 「受動的合意」という概念は、「体制を所与のものとして受け入れ、自分の日常の「義務」  
を果たそうとする姿勢」と定義することができる（테틀레프 포이케르트 지음, 김학이 옮  
김 『나치시대의 일상사: 순응, 저항, 인종주의』 개마고원, 2003, 110쪽）。これは、ナ  
チスドイツのファシズム体制下におけるドイツ国民の順応と抵抗の様態をいいあらわした  
ひとつの概念である。公的には忠誠の圧力にしたがい、自身にあたえられた労働に忠実だ  
が、私的には非政治的な余暇に没頭するといった人民の「二重生活」があった。これは、  
ナチスの大衆動員と背馳するものだが、だからといってそれを体制への反対や抵抗とみる  
ことはできないということである。これは、1970年代維新体制の反民主的な独裁と強力な  
国民統制および動員に対する多数の韓国民の対応の様相を説明することができる概念だ  
といえる。1960年代以降、経済成長の成果のなかで、個人・家族単位の成功と成長に対する  
熱望、大衆メディアを通じて増した消費文化への欲求は、政治的・公的領域に対する回避  
と順応を可能にしたと思われる。ここに加えられた「反共」は、現実的恐怖であり、体制  
への合意と順応を拡大させるおもな機制であった。

<sup>8</sup> 西川祐子 『日記をつづるとのこと——国民教育装置とその逸脱』 吉川弘文館、2009年；  
니시카와 유코 「근대에 일기를 쓴다는 것의 의미」 『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지  
와 국가』 소명출판, 2014.

唆をあたえる。「日記を書くという行為は、個人の習慣的行動であると同時に集団の習慣であり、さらに近代の日記はひとつの社会を維持するための装置」であって、なによりも日記は「自己言及性が強い内在的視点で書かれたテキスト」として「個人の内面」をうかがい知ることができる記録である一方で、その日記を読みなおす書き手（あるいは読者）がその日記に時代のイデオロギーを見出すものでもある、というのである<sup>9</sup>。

日記は、個人の記録として私的領域の日常を記録するものだが、「近代の個人は家族の一員であり国家の基礎」だという認識が深く根づいた時代にあって、日記は個人と私的領域にとどまらない。この点で、日常史・生活史という範疇をこえ、政治・経済・思想史の研究にも活用・検討されるテキストなのではないだろうか。本稿でとりあげる日記とその作者については、次章で詳述する。

## 2. 日記および作者の紹介

本稿では、平凡に日常を生きる「匹夫」たちが一日一日の自分の生活を記録した日記を通じて、1970年代の韓国で生きた国民の生活と意識をみていく。この時代は、分断と冷戦の状況における南と北の激烈な体制競争と、これにかこつけた「維新体制」という強力な独裁体制が形成された、政治的な暗黒期であった。農民や精米業者、化粧品販売員から韓薬師になった者など、4人の日記を比較分析する。

近代以降、日記は特定の身分や階層、文筆家、知識階級の占有物ではなく、大衆一般に教養と知識教育の一環として奨励され、場合によっては強制されることもあった。よって、初等教育機関の段階から、「日記をつけること」は学習・訓練された。日記は修養と学習の機制になったのである。

---

<sup>9</sup> 니시카와 유코, 前掲論文, 43, 54, 64頁。

自分の生活をみずから律し、計画し、成功しようという意志と欲望を実現する方法として、日記をつけることが多かった。本稿で検討する日記の作者たちは、30~40年間以上こつこつと、ほとんど毎日日記をつけた。

かれらが日記をつけるようになった動機と契機を正確に知るのはむずかしいが、『朴來昱日記』の朴來昱は、10歳になった年に「男子たるもの10歳になったのならこの世に痕跡を残しなさい」という母のすすめで日記をつけはじめ、母にみせて正しい書き方の指導も受けた、と日記をつけるようになったきっかけをあかしている<sup>10</sup>。

『昌平日記』の崔乃宇も、日記をつけるようになったいきさつははっきりしないが、かれにとって、日記をつけることは次第に大事な日課になり、日記帳に印刷された日付にあわせてその日その日の出来事を記録し、どうしても書けないときは、何日かずつ手帳にメモしておいて家に帰ったら日記帳に書き写す、というようなこともあった<sup>11</sup>。『大谷日記』と『牙浦日記』は、兵役を終えて故郷に帰り、農業をしようというなかで、慣習と伝統的な生活様式を脱して農村でも「近代的」で合理的な、成功した生き方をするのだ、という意志のひとつのあらわれが日記をつけることだったと思われる。

<sup>10</sup> 최명림 조사 집필 『기억, 기록, 인생이야기』 국립민속박물관, 2008, 48쪽.

<sup>11</sup> 김민영 「최내우의 삶과 일기쓰기: 근대의 표상, 전근대의 잔상」 『압축근대와 농촌사회 - 창평일기속의 삶·지역·국가』 전북대학교 출판문화원, 2014, 102쪽.

表1 日記および作者についての整理

日記名		大谷日記 <sup>12</sup>	昌平日記 <sup>13</sup>	朴來昱日記 <sup>14</sup>	牙浦日記 <sup>15</sup>
執筆期間		1959～	1969～1994	1953～	1969～
作者	姓名	申權植 <small>シンクワンシク</small>	崔乃宇	朴來昱	權純徳 <small>クワンスンドク</small>
	生没年	1929～	1923～1994	1938～	1944～
	出生地 ／居住地	京畿道平澤郡青北 面高棧里大谷マウル ／同	全羅北道任実郡三 溪面新亭里トギム マウル／全羅北道 任実郡新平面昌仁 里 <sup>16</sup> (昌平マウル)	全羅南道長城郡／ 全羅南道長城郡南 面中央洞⇒光州市 蓮堤洞 (1980)、新 安洞 (1986) ⇒ソ ウル (2003)	慶尚北道金泉市牙 浦邑大新里／同
	家門／ 家族関係 (子 供)	高靈申氏、申叔舟 の18代目 (嫡孫) ／3男	朔寧崔氏、1930年 代から区長職を独 占していた地域の 核的的な有力一族 (次男) ／8男3女	密陽朴氏、6・25 戦争時に両親死亡 (父親は警察官) ／2女1男	安東權氏、1男5女 中3番目 (次男) ／2女1男
	職業	農民	農民／精米業	職工／韓薬師	農民
	結婚	1956年結婚	1943年最初の夫人 と結婚／1946年2 番目の夫人と結婚 (重婚)	1963年結婚	1972年結婚
	学歴	-1935. 7～8歳ごろ 漢文講習所で学ぶ -1943. 青北国民学 校卒業 -1946. 善隣学校 (夜間)入学、1年在 学中に病気で休学 -1947. 通信学校付 属中学校、やはり 1年在学中に病気 で休学 -1948. 中等学校学 制改編により、東 洋工高入学 -1950. 東洋工高在 学中6・25勃発、 入隊	-1934. 館村普通学 校入学 -1941. 卒業	- 光州機械工高紡 績科卒業	- 初等学校卒業

日記名	大谷日記 <sup>12</sup>	昌平日記 <sup>13</sup>	朴來昱日記 <sup>14</sup>	牙浦日記 <sup>15</sup>
履歴およびその他の活動状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>-1955. 除隊。ソウル市庁に臨時で就職、6ヵ月後帰郷し、農業をはじめ</li> <li>-1960. 高棧第2里農業協同組合常務理事、高棧面議員</li> <li>-1964. 高棧里農業総会理事職辞任</li> <li>-1965. 三徳国民学校期成会理事</li> <li>-1973. 里長</li> <li>-1970年代 三徳国民学校育成委員</li> <li>-1997～2002. 成均館柔道会振威支部会長</li> <li>-2003～2005. 振威郷校典校</li> <li>-2007. 京畿道郷校財団監事、高霊申氏大宗会諮問委員</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>-1941-1943. 井邑自動車会社で職場生活</li> <li>-1949. 新任里長当選</li> <li>～1965年まで17年間里長</li> <li>-1946. 8. 2番目の夫人の助けで、順天で3・5馬力の発動機を購入、精米工場を開業</li> <li>-1965. 里長から身を引いた後、マウル開発委員長、浄化委員長、マウル山林契長、学校運営委員、同窓会長、共和党区議員、郷校掌議、任実南原宗会議長、任実老人会シンピョン支会長</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 紡績工場、化粧品納品業に従事</li> <li>-1971年、韓菓種商試験に合格</li> <li>- 故郷の全南長城郡南面中央洞で韓薬房をはじめ</li> <li>- 光州市ヨンジェ洞（1980）、シナン洞（1986）に移転</li> <li>-2003年、ソウルに移転し、2009年現在韓薬房を経営</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 釜山で軍服務後、除隊</li> <li>- 除隊後故郷に帰り農業を開始、都市に上京、再度帰農、</li> <li>- 軍服染色の商売を模索</li> <li>- 結婚後も製麵機屋、自転車屋⇒資本不足で両方店をたたみ、農業に専念</li> <li>- 土地1反地600坪ではじめる（おじの土地を借りして経営）</li> <li>- 労働投入量極大化、極度の耐乏生活、養鶏や畜産、特殊作物をこころみる⇒中農への階層上昇</li> </ul>
政治活動	共和党党员	共和党地域幹部		

<sup>12</sup>『大谷日記』は、京畿道平澤青北面高棧里に住む申權植が、1959年以来2005年まで一日も欠かすことなく書いた日記である。地域文化研究所において、2006年春から国史編纂委員会の支援を受けて平澤地域の近現代史史料の調査をおこなっていたときに、日記の主人公である作者と会い、総計44冊を複写した。1959～2005年まで総計47冊になるべきなのだが、そのうち1966年、69年、70年の日記の所在は把握できていない（신권식 『평택일기로 본 농촌생활사Ⅰ：평택 대곡일기（1959～1973）』；『평택일기로 본 농촌생활사Ⅱ：평택 대곡일기（1974～1990）』；『평택일기로 본 농촌생활사Ⅲ：평택 대곡일기（1991～2005）』 경기문화재단（사）지역문화연구소）。

<sup>13</sup>『昌平日記』は、全羅北道任実新平面に住んでいた崔乃宇（故人）の日記で、1969年から1994年までほとんど一日も欠かさず記録されたものである。研究チーム（이정덕・김규남・문만용・안승택・양선아・이성호・김희숙）は、2009年に「真実・和解のための過去事整

表1は、本稿で検討する日記と作者について簡略に整理したものである。『昌平日記』の作者の崔乃宇だけ亡くなったが、残りの3人は存命である。日記をつけはじめた時期は、『朴來昱日記』がもっとも早い。しかし、初期の日記は戦争の渦中で燃えてしまい、ふたたび本格的に日記をつけはじめた1958年以後にかればその時期の日記を一部復元した。その日記のうち、かれが1970年から韓薬師として働きながら書いた内容を中心に、当時の民間医療の実態を分析した研究がある<sup>17</sup>。『大谷日記』は、1959年から50数年間の農村生活の全貌をまめに記録している。この日記を対象に、農民の農業経営、自然認識、村内の関係、政治認識などについて考察した研究が

---

理委員会」の依頼を受け、任実郡で「朝鮮戦争期民間人集団犠牲者現況調査」をおこなっていたときにこの日記の存在を知り、その後全北大学「米・生・文明研究院」の「人文韓国(HK)」研究事業を通じて本格的な日記の分析作業をはじめ、2011年に韓国研究財団「韓国社会科学支援事業(SSK)」の支援を受けて2012年に日記を出版した(최내우『창평일기1』;『창평일기2』;『창평일기3』;『창평일기4』 지식과교양, 2012)。

<sup>14</sup>『朴來昱日記』は、全羅南道長城出身の韓薬師朴來昱の日記。かれの日記は、一部(1953-57)が『학호일기』(삶의 꿈, 2003)として出版されているが、1953年から2006年までの日記は、韓国研究財団の研究事業の結果、日記全体を影印し、e-資料(韓国研究財団基礎学問資料センター)として活用することができる。さらに、朴來昱は、日記と処方箋、金銭出納簿など一切を、2006年に国立民俗博物館に寄贈したが、博物館では著者の生涯史と影印日記を調査報告書の形で記録し、『기억, 기록, 인생이야기』(국립민속박물관, 2008)を出版した。

<sup>15</sup>『牙浦日記』は、慶尚南道金泉市牙浦邑大新里の農民權純徳の日記で、1969年から2009年以後まで、40数年間書かれてきた日常生活の記録である。全北大「SSK個人記録の社会科学」研究チームが「田舎の農夫が記録した農村近代史」という記事(『김천일보』, 2013. 6. 10.)をみてかれの所在をつきとめ、40数年間つけた日記を譲り受け、改題・出版作業をおこなった(권순덕『아포일기1』『아포일기2』『아포일기3』『아포일기4』『아포일기5』 이정덕・소순열・남춘호・문만용・안승택・송기동・진양명숙・이성호 편, 전북대학교 출판문화원, 2014.)。本稿で検討する1970年代のうち、『牙浦日記』は、1977年と78年はほとんど書かれていない。77年は全部で7日、78年は全部で17日だけである。

<sup>16</sup>昌仁里の昔の地名は、첵키ピョン(척평)、첵ムピョン(첵평)、뽕뽕(뽕뽕)とよばれていた。昌仁里にはいろいろな地名があるが、冊平という名前、村の形が本をひろげたようであるところからつけられたもの。

<sup>17</sup>원보영『『한약사 박래욱일기』로 본 20세기 후반의 민간 의료생활』『민속학연구』25, 2009.



ある<sup>18</sup>。『昌平日記』は1969年からはじまるが、それとは別に、作者が5歳だった1927年から1970年代までをふりかえって書いた『月波遺稿』がある。とくにこの回顧録は、解放から朝鮮戦争にかけて村でおきたイデオロギー対立と事件、戦争経験にかんする内容を合計140ページの分量で記録しており、口述・回顧録などを通じた朝鮮戦争期の一般民衆の戦争経験、村単位の葛藤などについての研究をおこなう上でも重要な資料となっている<sup>19</sup>。さらに『昌平日記』は、公開以降多くの研究がおこなわれ、この日記を集中的に研究した研究書が出版された<sup>20</sup>。

4人の日記は、執筆時期も長く、平凡な日常を記録している。本稿では、韓国現代史において政治・社会的に強力な独裁体制が形成され、冷戦秩序の破裂がはじまりつつも南北の体制競争が激化した1970年代に焦点をあてる。「維新体制」を生んだ権力の属性については、多くの研究があるし、理論的な分析も可能である。しかし本稿では、理性的で合理的な近代的思考によってでは容認しえないようなリーダーと政治・社会システムを容認した韓国の「大衆」の政治意識に注目したい。さらに、分断と戦争、世界的冷戦体制の最前線になってしまった朝鮮半島の大韓民国の国民が「反共国民」として体制化する姿をみていく。

4人の作者たちの政治的な傾向は、一言でいうと、みな保守的である。直接的な政党活動をしたのは、『大谷日記』の申權植と『昌平日記』の崔乃宇である。ただ、かれらの政党活動は、地域単位の「有力者」という社

---

<sup>18</sup> 김영미 『『평택 대곡일기』를 통해서 본 1960~70년대 초 농촌마을의 공론장, 동회와 마실방』 『한국사연구』 161, 2013; 김영미 「어느 농민의 생활세계와 유신체제」 『한국근현대사연구』 63, 2015; 안승택 「농민의 풍우 인식에 나타나는 지식의 혼종성: 『평택 대곡일기』(1959~1979)를 중심으로」 『비교문화연구』 21(2), 2015.

<sup>19</sup> 이성호 「한국전쟁과 농촌사회의 변화: 『월파유고』의 전쟁기록을 중심으로」 『압축근대와 농촌사회 - 창평일기속의 삶·지역·국가』 전북대학교 출판문화원, 2014.

<sup>20</sup> 이정덕·안승택 편저 『동아시아 일기 연구와 근대의 재구성』 논형, 2014; 이정덕 외 저 『압축근대와 농촌사회 - 창평일기속의 삶·지역·국가』 전북대학교 출판문화원, 2014.

会的地位によるものだと思われる<sup>21</sup>。『朴來昱日記』の朴來昱は、朝鮮戦争期に警察官の家族としてあじわった苦難のため、また『牙浦日記』の権純徳は、60年代以降執権与党の地域的な基盤となった慶尚北道の金泉に住んでいるという特性のため、日記にみられる政治的な傾向が保守的なのだろう。このような傾向は、「公開」された日記がもつ特徴であるとともに、限界なのかもしれない。依然として分断体制下にある韓国は、民主化の進展にもかかわらず、思想的に「検証された」国民だけが自由でいられるのではないだろうか。

1970年代は、1969年の3選改憲につづき、1972年の維新憲法の公布によって形成された維新独裁体制の時代であった。高度経済成長のながれのなかで、北朝鮮という反共の明確なターゲットが存在し、これをふせぎとめるために「政治的な安定」が必要だという執権勢力のプロパガンダは、警察、軍隊という国家公権力の下支えのもとで、国民に受け入れられていった。こうした現象については、朴正熙の独裁体制、維新体制に対する批判的な認識と研究が進むなかで、「日常的ファシズム」<sup>22</sup>や「大衆独裁」<sup>23</sup>といった言説が登場し、植民地支配とファシズム的支配は支配と抵抗という二分法的な枠組みではとらえることができない多様な側面——独裁に対する大衆の順応、この時期の大衆の日常に対する「肯定」の経験など——を分析することが必要だという問題提起をよびおこした。本稿でみる日記の作者たちは、おどろくほどよく権力に順応しているようにみえる。なにがかれら

---

<sup>21</sup> 申權植と崔乃宇は、政党人の地位（地域幹部）にあったため、「一般大衆」とみなしてその政治意識を判断することができるのかという問題がある。かれらは、地域における家柄、経済的成功や名声といった要件のために「地域有力者」と権力側によばれたわけだが、日記にあらわれた政治的活動には、その地域社会を先導するようなオピニオンリーダー、プロパガンダとしての役割はみられない。よって、かれらの政治意識を一般大衆のまなざしとしてとらえることは、それほど無理なことではないと思われる。

<sup>22</sup> 임지현・권혁범 외 『우리안의 파시즘』 삼인, 2000.

<sup>23</sup> 임지현・김용구 편 『대중독재론: 강제와 동의 사이에서』 책세상, 2004.

の政治意識を規定しているのか。執権保守勢力を「コンクリートのように支持」している韓国の保守的な国民の生き方と意識をうかがい知る機会になるだろう。

一方で、それぞれの日記は、作者の学歴や関心事によって、記録された内容にちがいがあある<sup>24</sup>。『大谷日記』と『朴來昱日記』の作者はともに高等学校を卒業しており<sup>25</sup>、自分の仕事（農業、韓薬師の仕事）について知識的なアプローチをしようとしているが、政治・社会問題についても、マスメディア（新聞・ラジオ）を通じて、具体的で事実即した内容を知ろうとする欲求が強い。このことが日記にも反映されている。とりわけ『朴來昱日記』は、国内の懸案に対して非常に深い関心をもち、主要な事件については新聞スクラップをするなど、きわめて精密かつ積極的に記録している。一方、『昌平日記』と『牙浦日記』の作者は、初等学校卒業の学歴で、その内容は家族や共同体内の日常的な関係に集中しており、政治・社会的な問題については、雑だったりどうということもない意見だったりという感じである。日記のおもな内容は、身の出来事に集中している。

### 3. 大衆の維新体制の受容——貧困と分断のトラウマ

1961年、5・16軍事クーデターをおこしたクーデター主導勢力は、8月12

---

<sup>24</sup> 4人の作者たちは、みな30年以上日記をつけた。作者たちの加齢、社会的・経済的状況や時代意識の変化などによって、内容は変化している。一例として、『牙浦日記』は、日記をつけはじめた1970年代にくらべて、80年代後半以降は、政治状況や農村政策について積極的に発言している。しかし、本稿は1970年代という一時期をみるものであるため、その当時の認識に焦点を当てることとする。

<sup>25</sup> 1962年当時の中学校進学率は、男子58.2%、女子19.6%、高等学校進学率は男子28.8%、女子11.6%にすぎなかった（『경향신문』1963.7.4. “늘어난 여자 중고 취학율”）。『大谷日記』の申權植と『朴來昱日記』の朴來昱の工業高等学校卒業という学歴は、当時の教育水準では高等教育を受けた知識層にあたるといえる。

日、「1963年8月15日までに政権を移譲する」という民政移譲計画を発表した。だが朴正熙は、民政移譲後に軍に復帰するという約束をやぶり、共和党の全党大会で大統領候補の指名を受け、1963年、大統領選挙に立候補した。1963年の大統領選挙は、共和党の朴正熙と野党の単一候補である尹潁善<sup>ユンボソン</sup>の一騎うちになったが、15万強の票差で朴正熙が当選した。1963年12月27日、朴正熙が大統領に就任し、第3共和国が船出した。

4年後の1967年の大統領選挙は、もっともつまらない選挙になるものと予想された。1965年の「日韓協定批准波動」によって野党がひどく分裂し、選挙を前にしてようやく大統領候補に尹潁善、統合野党である新民党の党首は兪鎮午<sup>ユジンウ</sup>ということで合意にいたった。このような状況でおこなわれた67年の大統領選挙は、争点がとくになかった。野党の旧態依然とした分裂と世代交代のない「年寄りの」政治家中心の政治構造がある一方で、1965年からのベトナム派兵、日本の請求権資金その他の資金やアメリカ・西ドイツの借款といった経済発展の資金が流れこみ、経済がかなりよくなっていた。「黄牛のように働きます」というキャッチフレーズをかかげた共和党(朴正熙)がふたたび無難に政権をとるものとみられた。結果は、総得票で132万票の差をつけて朴正熙が当選した<sup>26</sup>。

このような1967年の大統領選挙の政局について、『大谷日記』は、自身の政治的な立場を記している。「わたしはいろいろな面でやる気のない党員だろうが、現大統領の共和党政治がよくやっていることも多い。工業立国を叫び、富国した面はあり、建設的で意欲的で、果敢勇敢に仕事をする働き手だが、われわれ農民にはそれほどありがたいことじゃないと思う。農村が病んでいることは事実だ。地価が日ごとに下がり、穀価が日ごとに下がり、働き手も農村に来ず、農作業をいやがっているし、農民であるわたしにはそれほどありがたいことじゃない。かといって、ほかにたのものし

---

<sup>26</sup> 서중석 『대한민국 선거이야기』 역사비평사, 2008, 143~146쪽.

い人もいない。ただ、かえてみたらと思い、尹潯善に投票した」とのべた。しかし結局「今度の5・3選挙は、朴正熙候補が当選するだろう」と評価した<sup>27</sup>。

平澤<sup>ピョンテク</sup>の申権植は、この選挙の遊説の過程について、自分の地元「安仲場」<sup>アンチュンジャン</sup>の遊説で「共和党には無関心で、新民には拍手喝采」<sup>インチュン</sup>したし、仁川<sup>インチュン</sup>でも、車で動員した共和党より、場所も不便な新民党の遊説のほうが観衆が多かったという。しかしやはり、結果は共和党が当選するだろうとつけくわえた<sup>28</sup>。自身も野党（新民党）を支持し、大衆的な公開遊説も新民党が優勢だったのに、結局は共和党が勝利するだろうとの判断はなんだったのだろうか。

ある面で無関心だったり「静か」だったりした国民は、慣例のような感覚で執権層に票を投じたのだろうか。1967年の5・3大統領選挙と6・8総選挙は、不正選挙だという非難をあとから受けた。大統領、国務総理、長官、次官といった公職者たちが、特定の候補を支持する選挙運動をすることができるよう、大統領と国会議員の選挙法施行令をかえた<sup>29</sup>。それだけでなく、この選挙は、大金が出回る金権選挙、地方で善心公約〔有権者の票を得ることが本位の公約〕が濫発された選挙であった。大統領と国務委員たちが直接出むき、橋を架けアスファルトを敷き工場も建ててやる、といった善心公

<sup>27</sup>『大谷日記』1967年5月3日。以下、日記の原文を引用する場合、可能なかぎり原文表記をそのまま用いた。正書法の誤記や方言などは、当時の作者の情緒を反映したものと判断し、そのまま引用した。ただし漢字は、意思伝達に問題がないと判断される範囲内で、ハンゲルに変換した。

<sup>28</sup>「場で共和党・新民党の遊説があったのだが、共和には無関心で、新民には拍手喝采。安仲だけは新民が優勢だという観衆評——前日の仁川でも、里班長党员たちを車に乗せていった共和より、場所も不便な新民側のほうが観衆が多かったというが、共和が当選だろう」（『大谷日記』1967年5月1日）；「前日の安仲場では、大統領遊説で、野遊説で、共和党より新民党が大盛況、新民党場では、そのとおり！と拍手をするから安仲では野党だ」（『大谷日記』1967年5月2日）。

<sup>29</sup>『東亜日報』1967.5.10. “국무위원 등 선거운동 합법화”

約をかかげたせいで、与党支持が増えたのである。韓国社会に金が出回りはじめた時期と選挙がぴったりかさなり、有権者も金の味におぼれる亡国的な現象がおきた選挙であった<sup>30</sup>。

このような状況は、平澤も例外ではなかった。党员である日記の作者(申權植)に、共和党から毎日金を送られ、村人をもてなすようにさせ、総選挙の投票日も食堂は満員で食券が濫発されて出回るというような状況がつづいた<sup>31</sup>。そうしておこなわれた選挙の結果は、「ソウル・釜山<sup>プサン</sup>では野党が意外とダメで、地方では与党がほぼ全部だ。この地方でも、与党の李允鎔<sup>イユニョン</sup>氏が当選した。野党地方である平澤で与党が当選したのは、野党選出なら地方に発展がなく、今回だけは与党を選んで地方開発をやってみようという郡民の本心じゃないかと思うが、それでも僅差で与党が当選した<sup>32</sup>」。金の威力と「地方開発」という善心公約が効力を発揮した選挙であった。

1969年は、朴正熙の長期執権の第1次プロジェクトである「3選改憲」があった。『大谷日記』は69年の日記が紛失しており、『牙浦日記』の作者は政治の懸案についてほとんど言及していない。『朴來昱日記』は、3選改憲をしようとする執権勢力に対する学生たちのはげしい反対デモの様子を事細かに記録しているが、警察側の過剰鎮圧に対しては批判的な立場を示している。作者も、「3選改憲はない」という自身の意見を披歴している。

---

<sup>30</sup> 서중석, 前掲書, 150頁。

<sup>31</sup> 「共和党から、洞里の人たちに酒1杯ずつふるまえ、と一金600ウォンと、わたしに一金500ウォンを寄こしてきた」(『大谷日記』1967年6月2日)：「新浦から帰ると、共和党の組織部長がきた。この部落に一金600ウォンが出たのだからそれじゃ到底もてなすことができないという、もう一回寄るといふのだ」(『大谷日記』1967年6月4日)；「晩飯の前に共和党からきた。てぬぐいをもってきて、封筒もいくつかもってきた。晩飯には600ウォン出たので、煙草アリラン18箱、セマウル15箱を600ウォンで買って、洞里を回った」(『大谷日記』1967年6月7日)：「総選挙当日。(……) 新浦では飲食店がみんな満員だ。食券が濫発されたが、そのまま家に帰ってきた。イ・ユニョン氏が運動をいちばんやり、資金もいちばんたくさん使った。群小政党は運動がなかった。官権金権運動が与党のイ・ユニョン！」(『大谷日記』1967年6月8日)。

<sup>32</sup> 『大谷日記』1967年6月9日。

「デモがひろがったソウル市内の各大学とその動きは、全国的にひろがっている。数日前、釜山でも、そしてほかの都市でも、となりの光州<sup>グワン</sup>でも、その動きは尋常ではない。今回のデモの発祥はソウルの高麗大、そしてソウル、各大学がつぎつぎに座りこみをし、それから街へおどり出た。デモは、3選改憲反対糾弾大会に端を発するもの。ところが、これをむかえうつ警察は、デモ隊鎮圧用に催涙弾を発射するというので、最近のデモでは、これまでなかったペッパー・フォッグ〔Pepper Fogger. 催涙弾を発射する警察のデモ鎮圧用車両〕を使うとか。

それから、家に帰った大学生2人を派出所によび、高級警察官がボコボコ殴ったかと思えば、ソウル大学に入ってきた情報警察（刑事）を監禁、ボコボコ殴って張りあっている。問題は、デモ鎮圧が学生たちの感情を刺激したことだ。しまいには、デモをしようとする学生を教授が諭してスクールバスにのせていたのに、警察が棍棒で教授も学生もなく手あたり次第に殴り、バスの窓まで割る、そこで学生は投石で応じるというのだから、こんなことでいいのか。法を感情でおさめなければ、問題はなぜ学生が外に出るようにしたのか、現政治家の責任。文教部では、今日から学期末試験の延期で早期休暇、さもなくば全面休校だ、デモを鎮圧しようとする防波堤としては、いつでも休校で応じた。極度に達した感情を空白期にさまそうというわけだ。だが、デモというものが頭のなかからきれいさっぱりなくならなければならないという問題点をしっかり考えるべきだ。「3選改憲はない」

（『朴來昱日記』1969年7月5日）

「3選改憲反対汎国民闘争委員会」が、野党、学生・在野勢力を網羅して結成されたが<sup>33</sup>、共和党内でも、<sup>キムジョンピル</sup>金鐘泌系の3選改憲反対にもかかわらず、

<sup>33</sup>『東亜日報』1969. 7. 17. “삼선개헌 반대 범국민투위 발기인명단” “개헌저지에 총력”

朴正熙は国会で3選改憲案を強行採決し、国民投票にかけて通過させた<sup>34</sup>。共和党の地域幹部である『昌平日記』の崔乃宇は、国民投票に対する党の指示事項を受け、投票時に立会人を務めた<sup>35</sup>。だが、党の指示事項がどういうものだったか、3選改憲案に対する自身の立場はどうかについては、日記に書かなかった。『昌平日記』は、政治的な懸案や争点について、自身の意見を示さない。解放空間と朝鮮戦争期に地域でおきたイデオロギー葛藤とそれによって生死がわかれた経験は、政治的な言及を自制し、おもてに出さない態度をもたらした、とみることができないのではないだろうか。さらに、地域的にみて全羅北道の<sup>イムシル</sup>任実は、60年代後半以降、政治的に野党支持の傾向が集団であらわれたところであり、この地域で自分の社会経済的な地位にともなう執権と党の党員としてのあゆみは、外からみえる権力とはちがひ、地域民たちとのかかわりにおいて不都合な面もあっただろう。こうしたことが、かれの日記に反映されたのかもしれない。

3選改憲を通過させた朴正熙政権は、1971年にふたたび大統領選挙をおこなった。それまでの野党の古臭さと無能さからぬけ出そうと、野党新民党に「40代旗手論」が出るなか、<sup>キムヨンサム</sup>金泳三 - <sup>キムデジュン</sup>金大中 - <sup>イチョルスン</sup>李哲承の三つ巴で競選をしたのだが、結果は金大中が候補に確定した。朴正熙と金大中の一騎うちであった。金大中は、貧富格差の解決、4大国安全保障、南北間の非政治的交流など、型やぶりの公約によって新鮮な風をまきおこした。4人の日記の作者たちは、この選挙をどうみて、だれに投票したのだろうか。

まず、日記に政治的な関心事をもっとも積極的に記した『朴來昱日記』をみてみよう。かれは、1960年代の経済成長を誇りに思っていたが、民主

<sup>34</sup>『東亜日報』1969.9.15. “개헌안 공화 전격 변칙처리”; 『東亜日報』1969.10.18. “삼선개헌 가결 확실”

<sup>35</sup>「共和党の各面代議員総会議があった……ある議員（共和党国会議員）が主催者になり、国民投票に対する党員の方針を話してくれた」（『昌平日記』1969年9月22日）；「午前9時ごろに大里国民学校に与党立会人の資格で参加した」（『昌平日記』1969年10月17日）。



主義を回復した4・19、北朝鮮共産集団の挑発をふせいだ5・16を、いずれも肯定的に評価している<sup>36</sup>。とりわけ朴正熙政権について、「民族中興再建のピッチをあげた5・16革命政府以降。受け継いだ安定、朴正熙大統領の卓越した勇断と勤勉・誠実で有能な大統領がなしとげてきた経済復興こそ、後世に永く残るだろう<sup>37</sup>」とのべ、「朴正熙神話」の一端を垣間みせている。では、かれは71年の大統領選挙と総選挙において朴正熙政権を支持したのだろうか。結果はそうではなかった。朴正熙の功績を大きく認めながらも、地域差別の深まり<sup>38</sup>、民主主義の圧殺<sup>39</sup>、経済状況の悪

<sup>36</sup>「韓国がかなり成長し、韓国で生活している国民の水準が質的にこんなに大きく向上したのだ。事実、世界的にも1960年代は多事多難だったが、とくに韓国は、怒りによって素手で銃口とむかいあい主権を手に入れると立ち上がった4・19義挙、無能な政治とまかりまちがえば北傀の魔手に落ちるところだった危険な時期をただした5・16革命。その後、この国は絶えず発展、発展、成長してきた。もちろん、都市と田舎に顕著な差が生まれはしたが、それは都市が田舎にくらべて発展しすぎたためであって、田舎が前とくらべて発展していないからではない」（『朴來昱日記』1960代をふりかえっての所懐）。

<sup>37</sup>『朴來昱日記』1970年7月28日。

<sup>38</sup>「とくに今回の選挙は、地域人の色あいが顕著に誘発された選挙。嶺南嶺東（慶尚道）へと??されたりする〔原文ママ〕。ここの人たちは、共和党であれ新民党であれ、超党的な見地から冷遇を受ける湖南人の鬱憤を爆発させながら、湖南の人に票を入れると息巻いているが、果たしてどうなるか」（『朴來昱日記』1970年11月21日）；「今度の4・27大統領選挙の開票が終わると、嶺南があれば多くの票があふれた理由がといて疑いの度がすぎるほどで、かれらがいったいどれほど不正をしたのかといて慨嘆しているし、完全に地域対立の感情が激化している。せまいこの地が38度線によって南北にわかれたが、この南韓が東西にわかれるとは。それどころか、三国時代の新羅だの百済だのを連想し、慶尚道をさして新羅の奴ら新羅の奴らとっているし、家庭の主婦たちも調味料のミンは買わずミウオンだけ買おうと意気こんでいるのだから、この後遺症がいつなくなるやら」（『朴來昱日記』1971年4月30日）；「いまから列車に苦しまなければならない。ノロノロの3等鈍行列車に体をまるめ、5時間走らなければならない。あそこ（慶尚道）では高速道路がずっとのびて、ソウル-釜山の長距離でもたったの5時間以内だというのが、ここではいまだに古い汽車でガッタンゴットン、光州-木浦が5時間以上だというのに」（『朴來昱日記』1971年5月10日）。

<sup>39</sup>「今年の2大選挙（大統領、国会議員）を数カ月前にして、こともあろうに野党（新民党）大統領候補指名者の金大中氏の家で怪爆発事件があったかと思えば、大統領選挙庖宰の鄭イルヒョン氏（現国会議員）宅が火災事件にあい、新民党の重要書類と大統領選挙書類一

化<sup>40</sup>などの理由から、かれは野党を支持した<sup>41</sup>。大統領選挙では朴正熙が  
当選したが<sup>42</sup>、つづく総選挙で新民党が勝利したことについて、国民の政  
権交代への熱望を反映したのだろうとのべた<sup>43</sup>。その一方で、71年の選挙

---

切が焼却されて世の中が大騒ぎ、とくに第1野党の大統領候補なのだから、国民の望？  
〔原文ママ〕は、当然これはまちがいなく選挙を事前妨害しよう。現政府と与党の攪乱  
だ、いたずらだのなんだのと騒々しいありさま……とくにその後、爆発事件、火災事件に  
加え、怪脅迫手紙、脅迫戦をやるだれかのしわざだというのか。当局の捜査が外捜査に  
手をつけたがり、金氏鄭氏のかわりに側近捜査だけおこなわれたのだから、あきれかえる  
しかない（『朴來昱日記』1971年2月8日）：「みんな言葉はなかったが、4月27日の選挙は  
高等な手口の不正をしたという話だ。静かでもめごとなく選挙開票をしたというが、事実  
どれだけ多くの人たちの人権に圧力を加えたのかは、やられなかった人はわからない」  
（『朴來昱日記』1971年4月29日）。

<sup>40</sup>「14年前、5・16軍事革命がおきると、革命スローガンでまずいわく重農政策、だが重農政  
策は1日スローガンに終わり、工業にだけ重きがおかれた。それで、この国も工業立国だ  
とみんな自称するだけやった。とうとう地方ごとに工業団地、ああだこうだいてその庁  
舎地はすぐに外貨で、この国の国民が高糧価で腹が裂けるほどだが、ブレーキがぐいと  
とまりはじめるから、原動機のクランクに亀裂が入ってしまった。いまは生産過剰だ、生  
産品を売る気力がない。輸出高が年10億ドル、また35億ドルだのなんだの騒いだが、最近  
はさっぱりだ、その声もさっぱり消えてひさしい。ベトナム戦争が中止だから韓国の工産  
品輸出がいつそう中断したんだそう。だから自称工業立国がこりゃなんだ。ちかごろあ  
らたに流行している不実企業だのなんだのいう声に耳が痛いくらいだ。さあこれくらい  
なら、重農政策スローガンはスローガンにとどまり、工業にだけ重きをおこうが為政者の計  
算が目玉が動じない。これから農業に重きをおくとかいて、全羅南道だけでも麦100万  
石植える運動、稲600万石植える運動に、毎年のインフレをいいわけにして、年30%ひき  
あげてくれた」（『朴來昱日記』1971年11月8日）。

<sup>41</sup>「潤軒（朴來昱）H 女史（夫人）、大統領選挙のときも今度の国会議員の選挙のときも2回  
第1野党の新民党にかならず入れた」（『朴來昱日記』1971年5月25日）。

<sup>42</sup>「3月23日に選挙日が公告されて以来、与野間の熾烈な安保論争や長期政権の是非などで選  
挙の雰囲気は過熱したこともあったが、投開票の過程であまりにも差がつき、とんでもな  
い差で大韓民国第7代大統領は民主共和党候補の朴正熙氏が当選した。当選は嶺南の票田  
で大勢が決定だ」（『朴來昱日記』1971年4月29日）。

<sup>43</sup>「ところで、第1野党の新民党以外にも、国会進出議員が増えた。当初改憲阻止ライン3分  
の1をねらって熱戦をくりひろげてきたが、どうみても当初の予想より20席以上の収穫が  
得られたことになるだろう。予村野都をこわすという執権の計略はこっぴみじんになり、  
あばき出されたわけだ。共和が都市で大きく惨敗して野都の現況がきわだったし、ぐっと  
若返り学力多様になり、全国区も共和34議席をねらい新民党は17議席をねらったが、共和  
27議席に減ったし、新民24議席に増えたから、こりゃなんの棚ぼただ……こうして共和は

であらわれた深刻な地域感情とその対立を懸念している<sup>44</sup>。

平澤はどうだっただろうか。『大谷日記』の申権植は、1967年の選挙で、「それでもかえてみれば」という気持ちで尹善普に投票した。ところが1971年の選挙では、かれは朴正熙を選んだ。「第3代大統領に出馬できる憲法改正の共和党が——ひどいという感じがあるが、かといって現政権を引き継いだ野党もなく、わたしは朴正熙候補に投票した<sup>45</sup>。」かれには、金大中の公約や政権獲得能力は同意することができないものだったのだろうか。「年寄りの」政治家の古臭さと無能さも問題だが、40代の若い政治家は、未検証のそれこそ「幼くて信頼できない人」だと認識されていたのかもしれない。「やる気のない党员」だったかれは、いまや名実ともに党员になっていた。つづく5・25総選挙でも、「3選改憲は別にやる気はなかったが、かといって野党に政権をまかせるに足る党もなく、朴正熙に票を入れたが、今回も第1野党が金に目がない党首・柳珍山の波動（珍山波動）という不名誉なことをしでかしたし、さらに、本郡の立候補者・柳致松氏も、1次議員職のときに自分だけのはなばなしい国会での経歴があるばかりで、本郡の発展についてはおろそかにしたのは事実だった。それでわたしは、一介の共和党指導長よりも本郡の発展のために立った与党の崔榮喜氏に清い1票を投じた<sup>46</sup>。」

いまや『大谷日記』の作者の政治的選択の重要な基準は、「地域発展」

---

113議席、新民は89議席、国民1議席、全部204議席が分布当選したわけだ」（『朴來昱日記』1971年5月26日）；「建国以来はじめて多くの議席を確保した第1野党の新民党は、良憲政治にあかるい展望がみえるだろう。事実、共和党の人物が新民党の人物よりダメだからではない。すべてが野党を熱望した国民であり大統領候補金大中の票だった。共和党の52%、新民党の47.6%、不正は共和党が新民党にくらべて10倍はやっただろう。だから勝利は新民党であり、国民が政権交代を願っている証拠だ」（『朴來昱日記』1971年5月29日）。

<sup>44</sup>「とくに今回の4・27大統領選挙であらわになったのは、地域感情の悪化、この後遺症を現執政者はどうやって解決していくのやら」（『朴來昱日記』1971年5月22日）。

<sup>45</sup>『大谷日記』1971年4月27日。

<sup>46</sup>『大谷日記』1971年5月25日。

であった。この点は『朴來昱日記』とは異なるが、朴正熙大統領を信頼し支持しながらも、経済的困難、<sup>ホナム</sup>湖南〔全羅道〕差別のような地域問題が、かれの選択においてより重要な要素となった。1960年代までは、社会（国家）的単位の民主主義や経済状況などが判断基準だったとすれば、このときは自分の属する地域と家庭経済の安定と発展が重要な基準になったのである。総選挙の結果、野党の改憲阻止ライン確保という実質的な勝利の状況に対しては、改憲の牽制としてまともな議会になって独裁をくい止め、党利党欲にばかりかたよらず、国家と民族のために働くような、野党もよいことには協力してまちがったことだけ闘争するような議会になることを願う、と所懐をあかしている<sup>47</sup>。はっきりした闘争と対立より、両非論〔対立する2つの主張双方をまちがいだとする論〕にもとづいた協調を政治に要求しているのである<sup>48</sup>。

20代の青年だった『牙浦日記』の作者は、71年の大統領選挙と総選挙に熱心に参加した。大統領選挙では、朝早く投票所にむかい、総選挙でも投票に参加した。かれの地域では、総選挙より大統領選挙に多く関心があつまり、参加人数も多かったことが日記からみてとれる。大統領選挙では、「朝7時15分ごろに投票用紙記入所に行くと、すでに人が大勢集まっていて、列に並んで自分の番を待つて<sup>49</sup>」いたが、総選挙では、「昼飯を食べてから投票所に行ったらさいわい人がおらず、すぐに投票用紙に記入して<sup>50</sup>」家に帰った。また、大統領選挙の日には、投票をして、「早く帰ってきた

---

<sup>47</sup>「改憲阻止ラインをなし、改憲牽制をなし、本物の議会をなし、一代独裁を防ぎ、健全な議会をなし、党利党欲にかたよってばかりいないで、国家と民族のために働いてくれたら、野党もよいことは協力しまちがったことは闘争し、予野が本物の議会をなしてくれることを願う」（『大谷日記』1971年5月25日）。

<sup>48</sup>「これからやってくる議会は議会らしい議会をやるのか、さもなくば無視や反対だけをことするのか。国民がせつに願う」（『大谷日記』1971年5月27日）。

<sup>49</sup>『牙浦日記』1971年4月27日。

<sup>50</sup>『牙浦日記』1971年5月25日。

から仕事をやるならいくらでもやるんだが、みんな休日だといってあそぶのに、とてもじゃないが午前から畑に働きには出る気にならず、午前はゆっくりして午後から牛車で耕しに<sup>51</sup>」出かけた。まわりの人たちは、大統領選挙投票日を休日だと思って休むような雰囲気であった。これに対して総選挙の日は、「家に帰ってゆっくりする予定だったが、あそぶ人もおらずどうにも手持無沙汰なので、畑に出て草むしりをすることにして、1日の日課をやってしまった<sup>52</sup>」のである。

2つの選挙でどういう選択をしたか、かれは日記ではまったく言及していない。投票をして、投票日が休日に指定されたので、つらい日常からぬけ出して1日休むことができる言い訳ができた日だったが、実際かれは休めなかった。かれが地域社会でまだ政治的、社会的にあたえられた地位のないただの村の青年だったということがわかる。一方、地域社会の有力者で共和党の地域幹部だった『昌平日記』の崔乃宇も、選挙についての言及はかなりあっけない。かれは、選挙に参加しただけである。ところが、大統領選挙の当日に知人と言い争ったという。酒に酔ったというただし書きがあるが、ひょっとしたら選挙にかかわる論争だったのかもしれない<sup>53</sup>。

「3選改憲」というむちゃなやり方を動員してまでおこなった1971年の大統領選挙と総選挙において、朴正熙と共和党は、政権獲得にまた成功したが、その内容をみれば、金権、官権を動員した不正選挙と地域主義の結果であった。朴正熙と金大中の票差は94万票だったが、慶尚道で朴正熙が158万票多く、湖南では金大中が62万票多かった。結局のところ、嶺南ヨシナム〔慶

<sup>51</sup>『牙浦日記』1971年4月27日。

<sup>52</sup>『牙浦日記』1971年5月25日。

<sup>53</sup>「今日は第7代大統領選挙日だ。朝から造林費をばらまくのにいそがしかった。投票立会人として大里に行った。投票率は約85%だった。夕方には、郭在燁氏、郭仲燁と言い争いをしたのだが、酒に酔っていたのだろう」（『昌平日記』1971年4月27日）；「今日は民議員投票日だ。第1投票口の立会人として座った。投票は778票だった」（『昌平日記』1971年5月25日）。

尚道) 地域の組織票が朴正熙当選の決定打となった。ソウルでは、むしろ金大中が6対4で39万票多く獲得した。つづく総選挙でも、全体議席204席中、共和党113議席、新民党89議席で、改憲阻止ラインを20議席も上回り、朴正熙は、クーデター以外の方法ではこれ以上の長期執権は不可能な状況になった。

このような政局を突破するため、朴正熙は南北統一のカードをきった<sup>54</sup>。しかし、平和統一を大義名分として、1972年10月17日に非常戒厳を布告し、国会の解散、政党・政治活動の中止をふくむ約2カ月間の憲法の一部条項の効力停止という非常措置をとった。「祖国の平和統一を志向する憲法改正案」を公告し、ひと月以内に国民投票にかけて確定するというのである<sup>55</sup>。こうして確定された維新憲法による体制（維新体制）では、大統領選挙は直接選挙制度が廃止され、維新憲法によって組織された統一主体国民会議における間接選挙がおこなわれることになった。国会議員の選挙方法も、総議席の3分の2はひとつの選挙区から2名ずつ選ぶ中選挙区制をとり、残りの3分の1は大統領が指名し、統一主体国民会議でこれを選出する「維新政友会」の議員で占められた。それとともに、司法部と立法部の独立とその権限を無力化、すなわち三権分立が崩壊して民主主義が圧殺され、強力な一人独裁体制が形成されたのである。これに反対し抵抗する政治家、学生、市民勢力に対しては、戒厳令、緊急措置など、公権力を活用した無慈悲な暴力と弾圧がつづいた。

このような維新体制の成立について、韓国の一般大衆はどのように認識し、対応したのだろうか。『大谷日記』は、1972年10月17日と18日に、非常戒厳の布告と非常措置の実施をさらっと記し、「南北平和統一のために

---

<sup>54</sup> これについては第4章で詳細に検討する。

<sup>55</sup> 『경향신문』1972. 10. 18. “전국에 비상계엄 선포, 연말까지 대통령, 국회의원 선거”

やむを得ない日<sup>56</sup>」といい、受け入れる態度を示した。しかしかれは、維新憲法における大統領の特権的な権限、終身制に対しては批判的であり、国民投票の過程でみられた公然たる不正投票に反感をいだいた<sup>57</sup>。それでも、かれの票は維新体制に賛成であった。平澤の申権植は、執権与党に対する批判的な態度にもかかわらず、1971年の選挙から、朴正熙と維新体制に票を投じた。共和党员という地位に対する責任感のためだろうか。経済成長と「安定」という保守志向の感性が、理性的な判断にまさったのだろうか。

『朴來昱日記』は、10月18日に、新聞報道の内容をそのまま書き写しているが、それに対する意見はつけ加えなかった。憲法改正案が公告された10月27日には、「旧憲法の精神を継承しているが、祖国の平和的統一の歴史的使命を強調した。ところで、前に報道されたところによると、北朝鮮の労働党でも、北朝鮮の憲法を改正したそうだ。もしかして、この地でも南北統一がなされるのだろうか」とのべ、政府がかかげる平和統一という大義名分を受け入れている。かれは、維新憲法は平和統一と経済発展のためのものだとするところに同意して賛成票を投じたが、家族はみんな棄権、自身も「賛成票を入れて出てきた<sup>58</sup>」という表現で、まだ心からの同意に

---

<sup>56</sup>「晩7時に朴正熙大統領は非常戒厳を發布。国会の解散、政党活動の中止など、非常に意外な発表だ」（『大谷日記』1972年10月17日）；「朴正熙大統領の戒厳宣布は、前日7時に宣布されたので、どこもなく不安だ。平和時に戒厳とはじつにこまったことだ。南北韓平和統一のためにやむを得ない」（『大谷日記』1972年10月18日）。

<sup>57</sup>「投票などするまでもなく決定的だ。選挙管理委員会の従事員と立会人みんな絶対支持者だ。棄権なしでやれというので1人が何人式でやるのかと思えば、わんさか投票があつて反対の余地などない。わたしも賛成票を投じたが、公明投票ではないので不快だった。民主の芽は公明投票から出るものなのに、という思い切実。改憲案の賛成はするが、大統領の権限が外国にくらべて特権的で、大統領は終身をするようになるのではないかという考え、非常戒厳下の改憲もよい結果ではないこと。わたしも大谷部の棄権者に適当に賛成票を投じ」（『大谷日記』1972年11月21日）。

<sup>58</sup>「憲法126条附則9条によって成案した同大韓民国憲法は、南北平和統一の推進を早め、1000ドル所得を目標に、国民みんなが豊かに暮らすための憲法だという……H 女史（夫人）や弟も棄権、潤軒（本人）まで棄権なら大家族が棄権になってしまうということで、ユド

はいたっていないということを示している。

朴來昱は、維新体制に対して、かれが感じた5・16以後の社会のように、「社会の安定」と「秩序の確立」を期待していた。12月15日、維新憲法ではじめておこなわれる統一主体国民会議の代議員選挙について、初期には「選挙運動が過去とはちがってすごく静かで、金を使わない運動で、他者を非難しない運動が。選挙ビラの濫発とか舌戦とかなく静かに進んでおり……これはどれほど選挙風土がこの地でもかわったのかということだ<sup>59</sup>」とのべ、社会の風紀が正しくなっているのだと満足感を示した。しかし、すぐにこの選挙こそ金満選挙、墮落選挙になっていることを目の当たりにし、それについて慨嘆している<sup>60</sup>。

政府が宣伝する内容とはちがい、維新体制は朴正熙の永久執権のための独裁体制であって、それを実行する下部単位では、依然として不正と不法がはびこっていた。このような現実を目の当たりにしても「どうしようもなく」、あるいは代案を経験することができない状況で、執権勢力による

---

ン三叉路にある工業会館で投票をした。もちろん潤軒も賛成票を投じてきた」（『朴來昱日記』1972年11月21日）；「いまはこの維新憲法の土着化で、分断27年の南北統一が平和的にすみやかに来ることをねがう思いが切実だ。みよ、91.5%という世界史上類をみない投票の開票状況を、これは全世界民に韓国民が志向するところをはっきりと証したのである。われわれみんな、いい暮らしをしよう「ひとつになって」（『朴來昱日記』1972年11月22日）。

<sup>59</sup>『朴來昱日記』1972年12月8日。

<sup>60</sup>「統一主体国民代議員の選挙戦が中盤戦に入る。選挙運動は表ではなく裏でこそそそ歩き回って金を使うのだが、実際は前の選挙にくらべて金ももっとかかるというのだ。運動費用として、だ」（『朴來昱日記』1972年12月10日）；「維新憲法によって墮落選挙をせず、マッコリ飲まない・ゴム靴あげない運動だといったが、実際はそうではないようだ。夜、通行禁止時間をすぎるまで、急いで回る。村ごとに今晚は酒があり肴があるという。だれが金を出したのかはみんなシーシーしているが、ごくごく喉に流しこんだ者たちはよく知っているという。それだけじゃない。現金を公然とばらまいて回る。有権者1人当たり100ウォンずつ払ってやれ、とH女史にも3500ウォンを渡していったというのだ。でもそれだけじゃない。某人士にも別の候補者があてていったとのこと、それでH女史があげる人とかちあうんじゃないかと気にしている。表でやることより裏でやることの方がもっとおそろしく、ねちっこいものだ」（『朴來昱日記』1972年12月14日）。



「安定」と「発展」を期待して、かれらを支持していたものと思われる<sup>61</sup>。現実に対する批判的な意識が選挙などの政治的な行為では実行されないという矛盾した状況がつづいていた。これは、ドイツのナチス体制に対する大多数の人民のさまざまな批判と「不平不満」が、体制に対する部分的な承認、あるいは最小限の政府の権威に対する受動的受容と共存したという評価、つまり受動的な不満足、ぶつぶついう諦念、体制との個別的な妥協のなかで大衆は沈黙していたという分析<sup>62</sup>が参考になる。

さらに、指導者についての「神話」は、社会的・経済的な上昇と安全、未来の展望に対する要求と現実の日常との隙間を埋める役割を果たした。現実に対する批判は大部分が中下位の権力者に集中し、体制への同意は最高指導者に集められた<sup>63</sup>。朴來昱は、それまでのそれなりに批判的な社会

---

<sup>61</sup>「本日、大韓民国3400万全人口に維新憲法を問う。朴正熙大統領の現維新憲法に賛成するのか反対するのかをだ。これまで数カ月間、民主国民回復運動だの改憲すべきだの座りこみデモが苛烈だったし、野党では極限闘争をくりひろげてきた。そこで朴大統領が勇断をくだし、本日国民に問うのだ。ところが、野党は国民投票では不当なあつかいだといって開票拒否を本日おこなっている。H 女史は芬香国民学校で、潤軒は光州柳洞工業館で投票した。もちろんわたしたち家族は賛成だ。なぜ生きやすい現時点に反対するのか。北傀の挑発はくりかえされているのに。だから、全国投票率が80%になるのだ」(『朴來昱日記』1975年2月12日)。

<sup>62</sup> 데틀레프 포이게르트 지음, 김학이 옮김 『나치시대의 일상사: 순응, 저항, 인종주의』 개마고원, 2003, 91쪽.

<sup>63</sup>「高級公務員の光州の某氏は、かけ金100万ウォン台が飛びかう億台賭博がはっていると。この賭博の金が果たしてかれらの月給だとか。ありえない話。あきらかに国民の血税を搾取し、また taxation をした税務公務員の家はいい暮らしをしていい物を着て、不正品をとりしめるべき傭職者(原文ママ)は、民は治めるくせに、自分の家には外国製品がごちゃごちゃとあり、まるで外国家庭の展覧会でもするかのようにみせびらかしているのだから、この国は情けない。とくに世界情勢が急変しているこのとき、いちばん危うい位置にある小さな韓国の地でさすらい、政府官吏がみんな不正にふけているから、下職者も、おまえがやるのにおれはできないのかという具合に尻馬に乗ってこのごまだ。この難局を収集しようとするなら、いまからでも、国民が納得できるように不正の打開策を提示し、果敢に処理しなければならぬのに、不正が発見されはし、しつぽと首根っこをつかまえるが、その後処理はとんとんの音沙汰もないから、政府令をきっちり受け入れて守る国民がかわいそうだ」(『朴來昱日記』1971年10月30日)；「朴正熙閣下は、今回の選挙は絶対

へのまなざしにもかかわらず、結局「この地を領導してくださった現大統領は、17年間領導してこられた韓国の新紀元をつくったと賛辞をのべ、その「万寿無窮」を祈願した<sup>64</sup>。

一方、朴正熙政権に抵抗し反対する野党と学生、在野市民勢力に対する評価はどうだろうか。緊急措置をとり、さまざまな公安組織事件をつくり出してこれらの勢力に大々的な弾圧が加えられていた時期だったにもかかわらず、日記の作者たちは、そのような現実について特段言及していない。メディアも統制され、ラジオとテレビは事実を正しく伝えることができなかったとはいえ、それでも批判的な論調と事実を載せた新聞を購読する層は、当時の学歴水準と経済水準からしてそれほど多くなかったようである。4人の日記の作者のうちで、新聞を読んでいたのは朴來昱であった。だからかれの日記では、新聞を通じて知った政治、社会、経済の現実が整理されている。しかし、メディアの報道を事実そのものと認識するという限界があった。それ以上の批判や分析は加えられていない。

他方、緊急措置と、学生や在野市民勢力に対する行きすぎた抑圧については、「一党独裁体制」という単語を引用して批判しており、経済難による民生の困難については、朴正熙の「領導力」に疑問をいだいてもいた。社会秩序を回復して政治的・社会的な安定をもたらしてくれるだろうと期

---

に公正だと主張しておられるのに、底辺の人たちが清い水を濁す。わたしが共和党だがいちばんとびはねている。どうか、公明選挙が一日も早く来るように。全国民の審判がまことになされるように。自由選挙が一日も早く来なければならないのに。残念。執権党の権力濫用がなくなり、自由民主主義が実現することをわれわれ国民は願うばかりだ」（『大谷日記』1978年12月10日）。

<sup>64</sup>「大韓民国第9代大統領就任、本日11時に就任式をしました。1980年世界のなかで韓国を浮かびあがらせようとする大統領の労苦、全国民が朴正熙大統領閣下の就任をこころよりお祝いたします。そして、永くご健康で、万寿無窮であられることを願います。1980年代世界のなかの韓国は上位国へと駆けあがる秀麗山河、この地こそこの地を領導して下さる現大統領は17年間領導してこられた韓国の新紀元をつくられました。分断されたこの地に南北統一が成就したらと思うことせつであります」（『朴來昱日記』1978年12月27日）。

待していた維新体制が、その暴圧性によってかえって社会混乱をひどくしているということも、批判的にみている。

「憲法53条に依拠、大統領緊急措置4号発動。デモ学生たちに朴大統領が鉄槌をくださったのだ。とにかく、かれら学生たちには肝の冷える脅しだ。これから学生たちが気をつけなければいけないこと、朴大統領が現代の学生デモのことをいちばん頭が痛いと考えているから、この名案を掘り出したようだ。」

（『朴來昱日記』1974年4月4日）

「民主回復国民会議の宗教界で、汎野の人士たちが集まって現時局観を批判しているが、言論弾圧の即時中止を要求し、現執権党、現政府がおこなっている維新憲法を撤回しなければならないと主張し、それがなされるまで汎国民運動を展開していかなければならないと意気こんでいる。とにかく現政局は、微妙なことに、情報政治だといえるほど殺伐とした雰囲気なのだ。われわれも、これくらいなら先進隊列に加わって民主政治を自由なものにしていくことができるのだが、在野勢力をあまりにも拘束し、あるいは重い圧力を加え、一党独裁体制を実現しているし、現執権党では政権の野欲によって政権延長のみに汲々としており、口があっても物がいえないように忸怩していた（原文ママ）維新憲法の通過以降、その度がすぎて爆発してしまうのだ。とくにオイルショックによる物価高騰は一直線に突きあがっており、庶民生活は窮乏に追いこまれていき、大変だということだ。さまざまな不況が重なって、爆発したのだ。」

（『朴來昱日記』1975年1月15日）

「緊急措置1、4号違反者、釈放。人革党〔人民革命党〕の反共法違反者

などは除く。改憲論議、民青学連〔全国民主青年学生総連盟〕にかかわった者、全員釈放対象180名ライン・刑確定者146名・係留56名、破棄差し戻し1名、学生身分、全員釈放。民青にかかわった2人の日本人もふくむ。朴正熙大統領は、本日午前、第1号および第4号違反者全員を釈放措置にした。国論統一総和のための決断。朴正熙大統領の緊急措置違反者釈放の意義。もう少し早くこういう勇断がくだされていたら2月12日の国民投票も実施しなくてもよかったのに、とみんな賛辞をのべながらも遅きに失した感が否めないと残念がっている。」

（『朴來昱日記』1975年2月15日）

「2月12日、朴大統領は乱れた難局を収集するために国民投票をし、現維新憲法について、国民に信を問うた。結果、投票率70%ほどで賛成を得はしたが、乱れた難局は依然として収集がつかず、在野勢力と宗教界では、また民主国民回復準備委員会では、依然としてひっこみがつかず、今回の国民投票は無効だと宣言してしまった。じつのところ、朴正熙大統領は、国民投票を終えて拘束されていた政治家、学生、民青学連事件にかかわった拘束者も釈放したが、緊張が解消してもよさそうな政界は、依然として緊張した状態で、ぴりぴりと与野が対峙しており、だれがこれを仲裁するのだろうか。とくに、言論弾圧、東亜日報広告弾圧だとわめき散らしていきり立った筆は、怒りに満ちた炎のようにとどまることを知らず、がんがん政府とやりあっている。ソウル市民の視聴率80%をにぎっている東洋放送の怒りの声は、現政府のすみずみまで食いこむ。その真相の、ということだ。いつになったらこの乱れた難局は収集されるのやら」

（『朴來昱日記』1975年2月19日）

1979年、維新体制の矛盾は臨界点に達し、あちこちで深刻な破裂音が鳴

りはじめた。1979年8月のYH 新民党舎立てこもり事件<sup>65</sup>、金泳三総裁国会議員除名事件<sup>66</sup>、10月16日の釜馬〔釜山と馬山<sup>マサン</sup>〕抗争<sup>67</sup>まで、朴正熙の維新

---

<sup>65</sup>「最近の政街は極限のにらみあい状態で、冷水をまいたようであり、ややもすれば爆発しそうな殺伐とした雰囲気がただよう。これがまちがえば、全国的にデモがおこるかもしれないというきわめて危険な状態。発端は、11日午前2時、1000名強の警察官が麻浦区の新民党舎で2日目の徹夜座りこみ中だったYH 貿易女子従業員170数名を強制的に解散させた。4階講堂に新民党総裁の金泳三を中心とする国会議員20数名がいたのだが、ひきずり出して連行した。また警察はあえて国会議員と新民党員20数名を殴打までしたという。この最中にYH 女工金景淑（光州市鶴雲洞）??〔原文ママ〕が手首の動脈をきったあと投身、病院に運ばれたが亡くなり、朴權欽新民党代弁人は、頭と顔を強打されて血まみれになった。のみならず、これを取材した記者たちも暴行を受けた。YH 女工たちは、9日に新民党舎におしかけ、YH 貿易会社が倒産して工場稼働を中止したのでまた仕事ができるように力を貸してくれと要求しに来て、2日間も徹夜で座りこみをしていた。じつのところ、石油の値あがりによって国内では経済の沈滞現象がおこり、店をたたむことになった企業が多いという」（『朴來昱日記』1979年8月15日）。

<sup>66</sup>「数日前、国会議事堂で、白斗鎮国会議長の司会で、金泳三新民党総裁を国会議員から除名する決議をした。これにより、新民党の国会議員全員は、66名が総辞退書を国会議長に提出した。これにより共和党と維新政友会の国会議員たちは、新民党の辞職書を選別どおり処理、一部の野党議員たちの議員職を喪失させる方針をかためていると伝えられた。選別処理対象は5名以内、処理させる25日国会本会の続開後になると展望される。これはよくない兆候だが、これは野党を、そしてこれに追従する人びと、そして神経がするどい大学生たちに大きな衝撃をあたえるものであり、社会混乱を誘発する発生源になるだろうし、これによって政権交代をさげんで街におどり出てきたら、だれがそれをおさえるのか。洪水で溜め池の堰がきれたらだれも防げず、シャベルをもつ農夫は天をあおぐばかりだ」（『朴來昱日記』1979年10月16日）。

<sup>67</sup>「釜山で非常戒厳、学生デモにより大学休校、通行禁止の延長、18日0時をもって。10月16日・17日、釜山大学と東亜大学の学生3000名強が、政権打倒を主張して校内で示威をしている最中に、警察の制止により解散させられたが、市内の繁華街の中心地でふたたび終結、200名から500名が組になって6方向に進み、解散を勧告する警察とにらみあっていた最中、夜陰に乗じて一部の不純分子と合流し、警察官署に投石、器物を破損したかと思えば、巡察中の検察車両に火をつけ、都庁税務署および放送局と新聞社に侵入、器物を破壊するなど、偶発的な群衆の示威行動ではない組織的な暴挙であり、民心攪乱煽動と社会混乱を醸成する暴徒と化し、警察56名負傷、派出所21カ所破壊、警察車6台全焼・12台破損した。これが、野党の政治弾圧があまりにも深刻で、だんだん膿んだ創傷が爆発した症状だ。つまり、万が一全国的に貯水池がやぶられたら、だれがこれを防ぎきれるのか。しかし、鶴湖〔作者〕も国民みながこの混乱期の隙に乗じて北傀金日成が時をあわせたように南侵してこないか、ほんとうにこわいです」（『朴來昱日記』1979年10月19日）。

政権は、結末にむかってひた走っていた。これについて朴來昱は、日記にこうした事実をそれなりに詳細に記録し、一連の事態がゆくゆくは政権を崩壊させるかもしれないという憂慮もいただいていた。しかしかれは、「この混乱期に乗じて、北傀<sup>キムイルソン</sup>金日成が南侵してきそうぞこわい」という思いをつづっている。朴正熙政権の反民主主義的な一党独裁と暴圧性にある程度同意しつつ、それよりもっとおそろしく受け入れがたいのは、「北朝鮮の侵略」であった。国家安保と反共は、朴正熙政権の最高の保護膜であり番人だったのである。

結局1979年10月26日、朴正熙は、腹心のひとりだった<sup>キムジユギョ</sup>金載圭中央情報部長の銃でこの世を去った。当時の韓国国民にある程度当然視されていた「永遠の領導者」朴正熙大統領の死は衝撃的であった。『大谷日記』の申権植は、ラジオで大統領死去のニュースをきいたが、当時の政治的な混乱状況とむすびつけ、大統領が「暗殺」されたと表現した<sup>68</sup>。『昌平日記』の崔乃宇の大統領死去に対する反応は非常にシニカルで、「大統領が殺害されたときいた」という一言であった。告別式もテレビで観ればいいくらいのパフォーマンスにすぎなかったようで、かれの仕事と日常はつづいた<sup>69</sup>。

朴來昱は、朴正熙大統領死去に対して強い反応を示し、「すばらしい」指導者をうしなした喪失感、これからの韓国と国民に襲いかかることになる状況、それに対処しなければならぬ姿勢などについて、自身の考えを

---

<sup>68</sup>「食前に村に行った。ラジオのニュースをきいたかという言葉に、知らないと泰然と答え、家に帰ると、ヨンホがラジオをきけというのできいてみると、青天の霹靂のような報道、朴正熙大統領の逝去のニュース……最近の急変する混乱期になんのか、釜山、馬山の学生デモ事件で時局が混乱するなか、野党で議員総辞職など、ごちゃごちゃした時期に大統領の腹心の中央情報部長が大統領を暗殺したというのだから、なにがなんだかわからない」（『大谷日記』1979年10月27日）。

<sup>69</sup>「朝7時のニュースで、大統領が殺害されたときいた」（『昌平日記』1979年10月27日）；「今日は故朴正熙大統領の告別式だが、テレビをつけてみると見物する価値がありそうなので午前中は居間で休業した。午後は精米をした」（『昌平日記』1979年11月3日）。

つづっている。かれの大統領への献辞は哀切である<sup>70</sup>。そして、維新体制を合理化していた「韓国的民主主義」についても、分断と貧困から脱出することができる唯一の道だとかれは考え、金も後ろ盾もない現実の国民にとって、自由と生存権の保証は自暴自棄の道にいたらせるもの<sup>71</sup>だとし、朴正熙の「領導力」を称揚している。

以上、4人の日記を通じて、1970年代の維新体制を生きた「小さき人びと」の政治意識をみてきた。『牙浦日記』と『昌平日記』には、政治への言及がほとんどない。これを、政治に対する無関心とみるべきか、あるいは意図的な回避とみるべきかは、一概には断定できない。しかし、日記全般の叙述形態や個人的な傾向からみると、「若い」『牙浦日記』の作者にとって、政治はまだかれの人生に大きく入ってきてはいなかったようである。一緒に生きている隣人たちの政治的な傾向も、1967年の選挙からはっきりとあらわれた地域感情のため、「嶺南の指導者」である朴正熙（共和党）を支持

<sup>70</sup>「あなたが逝かれるとは。26日11時、忠南挿橋川の防潮堤式場におみえになったとき、年とった村老の手を親しげにがっちりとにぎり、竣工テープをきったのだが、今も昔もかわることなく朗々と鳴り響くその肉声。83年までには大きな水害をなくすと約束して下さったのに、思いもかけず、途轍もない青天の霹靂のようです。あなたがこの地におられたとき、この地には繁栄がもたらされ、あなたがこの地におられたとき、われわれに安定がもたらされ、あなたがおられたとき、われわれはあなたをあんなにも信じ、信頼し、つきしがいました。あなたがおられないこの地の民にとっては、もはや主人をうしない柱がたおれるような青天の霹靂だったのです。天が崩れるようです。神さまと仏さまは、こんなにもこの地で従順な、この国のこの民をおみすてになるのですか。機知と知恵に富んだこの韓民族の南端にある3700万の民は、どうせよというのですか。北傀がねらうこの地に、われわれは総力安保でたく立ち、あなたが積まれた功が無駄にならぬようにいたします」（『朴來昱日記』1979年10月28日）。

<sup>71</sup>「韓国的な民主主義が求められてきた現実の韓国民だ。名誉と威信を尊重することなのか。その民主主義を共産主義と、38度線で腰がきられたまま極と極で対峙しているこの朝鮮半島、そして貧しさに苦しみ、物価が安定していないため、名誉と威信は捨ててしまい、ただ人のポケットから金をむしりとることだけに汲々とする韓国民としては、あまりにも差が大きいのだ。ところで、国民の自由を熱望し生存権を保障するとかいって保護をやったとなると、現実の国民は金も後ろ盾もないとなると、人生を自暴自棄する者ももっともおそろしくもっとも悪い者だ」（『朴來昱日記』1979年11月15日）。

するのは当然のことだっただろう。一方、『昌平日記』の作者にとっては、戦争の渦中であじわったイデオロギー対立のトラウマのなかで、政治的な傾向をおもてに出さないことが「正しい処世術」だったのかもしれない。かれは保守的な傾向のある地域有力者であり、執権党である共和党の地域幹部として、自身の事業と生活の保護膜をつくっていたが、そのために最低限の政治活動をしていたと思われる。さらに、全羅北道の任実という地域は、慶尚北道の金泉とは異なる地域感情が噴出する土地だったため、かれの政治行為は、地域社会において影響力や支持が大きくなかっただろう。このような点は、かれが日記で政治的な言及を自制することは「意図的な回避」だったと評価する根拠にもなるのではないだろうか。

『大谷日記』と『朴來昱日記』の作者は、当時としては高学歴であり、新聞や書籍などを通じて、社会の現実と政治的な懸案について、自身の考えと意見をもつことができた。1960年代まで野党支持の傾向があった『大谷日記』の作者は、1971年の選挙から、朴正熙と共和党を支持するようになった。執権勢力の不正腐敗と権力濫用に対して批判的でありながらも、「安定」と「発展」のために朴正熙の長期執権が不可避だと判断したようである。やはり、分断状況と貧困の克服のための経済発展が、ほかのなによりも現実的な威力をもつ判断基準だったのである。朴來昱は、もっとも積極的に政治的な発言をしている。日々新聞を読み、そこから世の中の多くの情報を得て、その内容と自身の考えを日記につづった。全羅南道の長<sup>チャン</sup>城と光州が故郷と生活の場だったかれは、1971年の選挙では、金大中を支持した。しかし、1972年の維新体制の成立については、おどろくほど積極的に支持した。以後、経済状況の悪化と民主主義と人権に対する行きすぎた弾圧に批判的なまなざしをむけることもあったが、かれは、朴正熙と維新体制はやはり「虎視眈々と赤化の野欲に燃える北傀」、そして依然としてひもじい経済という現実を突破することができる最高のシステムだと認識していた。しかも、現実の問題は、指導者の衷心をねじまげて悪用する



「下の者」のあやまちにすぎず、指導者の理想とビジョンは正しいものであった。「朴正熙神話」は、そのようにしてつくられた。

#### 4. 冷戦の恐怖と「反国民」としての生き方

反共主義には長い伝統がある。それは、近代共産主義とともに、1848年『共産党宣言』の出版の後に胎動した<sup>72</sup>。だが、反共主義が絶頂に達したのは冷戦期である。大韓民国は解放と同時に米ソの軍事占領によって分断され、東アジアの冷戦の最前線となり、そこに南北2つの政府が樹立された。大韓民国の誕生の根幹には反共主義があったが<sup>73</sup>、このことの2つの背景には、反託運動と朝鮮戦争があった。李承晩政府の1950年代反共イデオロギーの代表的なスローガンは、「滅共」と「北進統一」であった。しかし1960年代以降、経済成長と近代化そのものが、反共イデオロギーの核をなす内容と理論として差別化され、「勝共」が60年代のキャッチフレーズの核心になった<sup>74</sup>。

60年代末から70年代はじめにかけて、朴政権は、アメリカの対アジア政策の変化によって生じたデタントを危機と認識し、緊張緩和を緊張高潮と受けとり、国家安保危機論をひっきりなしに説いた。その背景には、第1に、1968年の「1・21青瓦台襲撃未遂事件」や「プエブロ号拿捕事件」、<sup>ウルチン</sup>「蔚珍・<sup>サムチョク</sup>三陟武装共匪浸透事件」などは北朝鮮が戦争遂行能力と情報力を兼ね備

<sup>72</sup> 기외르기 스텔, 크리스토프 폴만, 김동춘 「머리말」 『반공의 시대 : 한국과 독일, 냉전의 정치』 돌베개, 2015, 20쪽.

<sup>73</sup> 韓国の反共主義は、民族主義と国家主義であり、市民を国民に統合するための血縁主義的、全体主義的な思考にもとづいているという見解 (박태균, 前掲論文, 269頁) と、単純な支配イデオロギー=支配層のイデオロギーだったものをこえ、韓国社会の支配的かつ広範囲にわたり多様な層として存在する「反共」に対する「考え方と感じ方の複合体」であり一定の「感情構造」の総体だという評価 (이하나, 前掲論文, 509頁) がある。

<sup>74</sup> 박태균, 前掲論文, 267~268, 281頁。

えている証拠だとみたこと、第2に、駐韓米軍撤収の議論がおきたこと、そして第3に、デタントの雰囲気に乗じた南の反政府勢力がそれぞれの声を高め、南北対話、そして統一を主張するとしたらそれは政権と体制を擁護する立場からは抑えようのない脅威になると憂慮したことがあった<sup>75</sup>。これは、60年代以降の、経済建設と開発のための北朝鮮との体制競争の論理であり、「国力培養論」、70年代には「自主国防論」と「総力安保論」として全面化した<sup>76</sup>。

1968年の「1・21青瓦台襲撃事件」、「プエブロ号拉北事件」と「蔚珍・三陟武装共匪浸透事件」は、朴正熙政権が安保問題を国家運営の前面におし出すきっかけとなった。『大谷日記』では、1月21日から26日まで、武装共匪の青瓦台襲撃と米国プエブロ号拉北のせいで、戦争の不安と恐怖に毎日「不安な1日を送って」と書いてある<sup>77</sup>。このような北朝鮮の侵略の恐怖は、漠然としたものではない、わずか20数年前の朝鮮戦争の記憶をよみがえらせる直接的な恐怖と敵対心をよびおこした。

---

<sup>75</sup> 이하나, 前掲論文, 513~515頁。

<sup>76</sup> 김지형, 前掲論文, 184, 188~189頁。

<sup>77</sup> 「夕飯を終えると、車が来たといい、北韓からスパイが来たど、情報係長と情報係刑事が来て、朴刑事が家に泊まった」(『大谷日記』1968年1月21日)；「昨夜10時40分ごろ、首都ソウルの孝子洞に、北韓ゲリラ1個小隊兵力があらわれ、実際に4人生け捕り、2人をつかまえた。このゲリラは、青瓦台を奇襲しようと思ったのだという。わが方の被害も、鐘路警察署長が死に、一般良民の被害があったという」(『大谷日記』1968年1月22日)；「李巡查と徐巡查がうちに泊まった。北韓の遊撃隊とわが方の国警の交戦が数回あったという。今日までに15人死亡・1人生け捕りだと。わが軍の被害、今日陸軍大領が死亡したと」(『大谷日記』1968年1月24日)；「韓国の東海にいる米情報艦が拉北され、全世界の耳目がわが韓国に集中！北韓ゲリラがわがソウルの青瓦台を奇襲しようとして逃げたのにつづいておきた重大事件だ。アメリカから重大声明が出るだろう。戦争でもおこらないでくれたらいい。いつになったら平和な国で暮らせるのだろうか。不安ななかで1日をすごした」(『大谷日記』1968年1月25日)；「超緊張に浸されたわが韓国は、今日も不安のなかにいるが、明日零時の「国連」常任委員会を待っている。今回の北傀ゲリラの南派と米情報艦の拉北につづき、火を噴く戦争へとひろがるのか、あるいはうまくおさまるのかという岐路に立っている。不安な1日をすごした」(『大谷日記』1968年1月26日)。

1968年4月1日、「郷土予備軍」が創設された<sup>78</sup>。1970年代の反共体制における「総力安保」の象徴である郷土予備軍は、日常生活において、国民にどのくらいの負担と意味をもたらすものだったのだろうか。軍を除隊して間もない25歳だった1969年から日記をつけはじめた『牙浦日記』の權純徳は、郷土予備軍の最初の対象者であった。郷土予備軍の服務期間は、1988年までは転役時期を問わず35歳までだったため、かれは35歳になる1979年に郷土予備軍を除隊した。表2は、かれが日記に記した郷土予備軍関連の事項を整理したものである。

日記に記録された内容が年度別に差があるので、郷土予備軍の召集・動員日すべてを記録したものとはいえないだろう。しかし、1969年と1970年の状況が、70年代の予備軍動員の実態をよく反映していると思われる。ほぼひと月に1回以上、予備軍訓練で1日の短期召集や2泊3日（または3泊4日）の動員訓練を受けている。予備軍召集はほかのどんな用事より優先しなければならなかったため、自分の農作業や重要な家庭の仕事があっても、かならず参加しなければならなかったのである。權純徳は、郷土予備軍の召集にしっかり応じた。しかし、予備軍内の綱紀はきちんと守られていない状況であった。いそがしい農繁期に2人1組で村の警備にあたらせられるためにさぼる人がいたり、銃まで奪われる綱紀のたるみが出たりしたが、かれ自身も訓練教官の目を盗んで訓練をさぼり、飲み屋で友達と時間をつぶ

---

<sup>78</sup> 朴正熙政府は、1968年の1・21共匪事件のような武力挑発に対して、軍事的になんの報復も懲罰もしなかったらこれが先例となって共匪の南派がつづくだろうし、受け身で対処してばかりいたら戦略・戦術上不利な立場に置かれるだろうから、強硬な制裁方法によって北朝鮮の挑発を抑制する必要性が切実に要求される、ということで、①従来の国連中心の国防体制から自主的な国防体制への転換、②郷土予備軍250万人の武装化、③武器生産工場の年内建設など、自主国防の必要性と決議を闡明するにいたった。この決議により、政府は1968年3月に「郷土予備軍設置法施行令」を制定・公布し、1968年4月1日、郷土予備軍が創設された（한국학중앙연구원 『한국민족문화대백과』 '향토예비군 [ROK Reserve Forces, ROKRF, 郷土豫備軍]'）。

表2 牙浦日記の予備軍の訓練状況（1969～79）<sup>79</sup>

年	月	日	日記の内容	
1969	1	8	郷軍教育に政訓教育、牙浦支署主任が教官	
		1	20	郷軍教育、銃剣術、政訓教育
		2	24	郷軍教育、射撃
		3	5	予備軍召集日、政訓教育、各個戦闘
		3	26	滅共作戦運動（偽装スパイをつくり、5日間反共精神を育てるため集落ごとに2名ずつ歩哨
		4	5	郷軍教育、政訓教育
		6	29	郷軍警備（2名ずつ1組、2時間ずつ）
		7	27	郷軍予備兵教育、政訓教育
		8	25	郷軍召集日
		9	3	郷軍召集日、郷軍訓練カード配布
1970		10	22	郷軍召集日（7時までには到着、しかし10時から車で移動、以後3泊4日の訓練）
		10	24	郷軍教育（訓練内容退屈）
		10	25	郷軍練習召集（3泊4日終了）
		1	2	郷軍召集日
		1	25	郷軍召集日
		2	26	郷軍召集日 - 病欠
		3	13	郷軍召集日
		4	4	郷軍創設記念式
		4	7	郷軍召集日 - 100ウォン支出（固定費用）
		5	7	郷軍召集日
1971		5	13	郷軍召集日 - 遊撃場建設賦役
		5	16	予備軍銃器召集日
		5	20	郷軍動員訓練（深夜3時召集 - 午前7時出発）
		5	21	動員訓練（不十分な教育場、施設劣悪）
		5	28	予備軍회초〔原文ママ〕（食事をつくって一緒に食べること）
		7	18	郷軍召集日
		7	24	郷軍召集日
		8	14	郷軍召集日
		9	14	郷軍召集日
		9	20	郷軍召集日
1971		10	1	国軍の日 - 郷軍小隊対抗競技
		11	9	郷軍兵器召集日
		12	26	郷軍訓練日（母の亡くなった日が郷軍訓練日なので延期して、かわりに今日受ける）
		4	3	第3回予備軍創設記念式
		8	11	郷軍召集日
		9	1	予備軍甲砲部隊機動訓練
	9	7	予備軍教育	

年	月	日	日記の内容
	9	20	予備軍教育 - スパイ析出教育
	11	15	郷軍召集日
	11	26	予備軍巡回教育 - 銃支給 (1泊2日)
	11	27	予備軍巡回教育
1972	3	23	動員訓練練習
	4	1	予備軍創設4周年
	5	17	予備軍訓練 - サッカーの試合
	8	18	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	8	19	予備軍巡回教育
	8	21	郷軍と4Hとのサッカーの試合
	9	6	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	9	7	予備軍巡回教育
1973	1	8	セマウル教育
	1	9	セマウル教育 - 不参加
	4	6	予備軍の日 - 記念行事
	7	20	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	7	21	予備軍巡回教育
	7	31	予備軍巡回教育2次
	8	13	予備軍訓練
	11	7	予備軍教育 - 中隊長責任下の教育
1974	1	8	セマウル教育
	3	11	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	3	12	予備軍巡回教育
	5	11	予備軍中隊本部建設に予備軍動員
	6	12	米3000万突破作戦 - 予備軍を動員し、高速道路周辺の麦畑を刈る
	8	21	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	8	22	予備軍巡回教育
1975	5	30	予備軍訓練
1976	3	19	予備軍ワシ作戦 - 予備軍全員が1日24時間勤務 (夜どおし勤務)
	4	2	予備軍動員訓練
	4	6	予備軍夜間教育
1979	4	18	予備軍各個点呼
	4	30	予備軍巡回教育 (1泊2日)
	5	1	予備軍巡回教育
	12	22	予備軍除隊

<sup>79</sup>『牙浦日記』では、作者の予備軍訓練の状況を記録しているが、この表では、1969～1974年の記録だけを整理した。75年以降、予備軍にかんする記録が顕著に減少し、1977年と1978年はほとんど日記をつけておらず、郷土予備軍にかんする記録も抜け落ちている。

したりした<sup>80</sup>。

また、公務員や予備軍教官の無責任でえらそうな態度に対する反感も大きかった。予備軍召集訓練の時間がきちんと守られず、時間を守った人たちだけが損をすることが非常に多く<sup>81</sup>、毎日の農作業でいそがしいのに、動員訓練に行くから夜中3時までに来いと召集命令を出しておいて、寝ないで行って見たら午前7時まで出発しない<sup>82</sup>、召集訓練時の費用も自腹で、

---

<sup>80</sup>「郷軍警備だと連絡兵が連絡してきて、1個警備兵は4人で、2人1組で立つのだが、1組が約2時間立ったのにもう一方が立たなかったら、どういうわけで郷軍警備を立てるのかわからないじゃないか。郷軍が自発的に立つというならわかるが、このごろは農繁期なのに、郷軍をよんで警備しろというから、郷軍がみずから願い出て率先垂範して立つならわかるが、ひどい農繁期に苦しんでいる体だから、1人も自分の位置につく人はなく、警備兵が銃まで奪われるざまなのだから、どういうわけで警備兵をつくったのかわからない」（『牙浦日記』1969年6月29日）；「郷軍練習の招集日のとき、友達と飲み屋を回って騒ぎ、訓練を受けまいと悪あがきをし、教官の目をさけて松林のなかに隠れ、1回さぼろうと隠れてすごして」（『牙浦日記』1969年10月26日）。

<sup>81</sup>「郷軍の招集日で、牙浦支署到着が9時までなのだが、われわれは10時ごろ着いた。わたしは自転車に乗って10時ごろに着いたのに、歩いていく人たちは11時ごろに着いた。郷軍は時間を守る必要がないと認めているようなものだ。なぜなら、いままで欠かさず郷軍召集ならすべての仕事をさしおいて参加したのに、なにもかも甲斐なくすぎてしまう。なぜなら、郷軍といえども秩序より時間をきちんと守らなければならないのに、時間も守らず、10時に来た奴が、8時に来た奴も11時に来た奴もみんな一緒に活動をするのだから、郷軍に真心を尽くした奴も、こういう状態で運営するのならそのうち麦粥になってしまうだろう」（『牙浦日記』1970年1月2日）；「郷軍の招集日だから牙浦支署に8時ごろに着かなければならないという話がひとつの冗談になるほど、時間を守る人が1人もなく、郷軍の基本精神をもって出席した人が5分の1ほどしかおらず、これからは郷軍の精神武装を強化してこそ自分が恥を受けないのであって、余事で出席したら処罰を免れないと思う」（『牙浦日記』1970年1月25日）。

<sup>82</sup>「郷軍の動員訓練があるから夜中の3時までには面事務所に来いというので、夜も眠れず暗い道を行き、面事務所に入ると、先に来ていた人はこっくりこっくり居眠りしており、人びとの目が死にゆく者の目で、光彩はみょうにもみえない目をしているのを見るとき、自分の考えでは、1日もっとする仕事があるとしても、昼間を利用して教育をしなければならぬということを感じたが、それより、夜中3時までに来いといっておいて朝7時に出発し、3時までに来いといっておいて朝7時まで出発させないのだから、一方で悪口をいいたくもなかった」（『牙浦日記』1970年5月20日）。

1回の召集で100ウォン支出しなければならず経済的負担がある<sup>83</sup>、といったことをつづっている。農繁期のいそがしい日常のなかでの予備軍召集は、「反共のための総力安保」という名目の、軍事的な実効性のない、冷戦の恐怖と反共イデオロギーをひろめるための動員体制だったのである。このような面倒さにもかかわらず、かれは予備軍に皆勤し、ほかの同僚たちと訓練日程がちがうときなどは、どんな不利益をこうむるのだろうと心配した<sup>84</sup>。予備軍の対象者がさぼったらすぐさま「非国民」の烙印を受け、それによってどんな問題がおきるかわからないようなおそろしい社会だったのである。

一般国民と地域有力者を対象とする反共教育もおこなわれた。さらに、1975年には、民防衛隊が創設され、20歳から50歳の男子が対象となったが、その年齢以外の男性および女性は、志願によって隊員になることができた<sup>85</sup>。『大谷日記』の申権植は1929年生まれで、75年の民防衛隊創設当時は46歳だったので、対象者であった。かれは、1974年の年末から民防衛教育に参加したと記している。表3は、『大谷日記』と『昌平日記』に記された反共および民防衛の教育にかんする内容である。やはりすべての行事を記録したとはいえないが、おおよその状況はつかむことができる。崔乃宇は1975年当時52歳だったので、民防衛隊の対象者ではなかった。

『大谷日記』の申権植が参加した団体および行事は、反共指導委員会、反共要員、反共連盟会、反共評議会、農協役員会、自願指導者評議会、防衛評議会主催の大会・会議・座談会、見学（トンネル、最前線）などであった。

<sup>83</sup>「郷軍の招集日にはきまって100ウォンの支出があり、100ウォンの価値を自分が食べて100ウォンを支出するならおしくはないが、わずか50ウォンの価値を食べて100ウォンの支出だから、胸が痛かった」（『牙浦日記』1970年4月7日）。

<sup>84</sup>「予備軍、甲砲部隊の機動訓練を受ける、とクミ、コアソンリム、訓練をする今日から全員出発したが、どういうわけか自分には令状が来ず、訓練からはずされたが、あとで客地生活をするとときに支障がないか心配だ」（『牙浦日記』1971年9月1日）。

<sup>85</sup> 한국학중앙연구원 『한국민족문화대백과』 '민방위 [民防衛]'

表3 反共および民防衛の教育（『大谷日記』、『昌平日記』）

年	月	日	大谷日記	昌平日記
1971	3	8		南派スパイ自首者、北朝鮮の実情についての講演
1972	4	28		反共教育（6時間）
1973	4	3		反共教育（警察署情報課長が参席）
1973	8	4	反共教育（安仲）	
1974	7	21	反共指導委員会	
1974	7	25	反共指導委員会 - 不参加	
1974	11	20	反共要員教育	
1974	12	26	民防衛教育／反共連盟会営農教育	
1975	7	29		斗流〔マウル〕入口にスパイ出現、予備軍全員動員、軍警召集
1976	3	24		
1976	4	23	民防衛教育	全州、対共結団式 - ソウル統一院 - 楊州郡25師団 - 最前方高地トンネル見学
1976	4	24		臨津閣 - 板門店 - 国会議事堂 - 銅雀洞国立墓地 - 顕忠祠
1976	5	14	反共教育	
1976	5	17	民防衛教育	
1976	9	17	反共指導要員教育(対共マウル総動員)	
1976	9	18	民防衛隊幹部教育	
1976	9	30	農協監事教育（～10月2日、2泊3日）	
1977	3	3	反共座談会	
1977	4	20	反共座談会（講演、スライド、映画）	
1977	4	21	反共協議会 - 基金助成	
1977	4	23	農協役員会 - 反共連盟、反共会費贊助	
1977	5	10	民防衛教育	
1977	10	5	国民の日 - 民防衛教練	
1978	3	7	志願指導者連合会 - 昌原トンネル見学	
1978	11	29	防衛協議会 - 公州武装共匪	
1979	3	28	反共連盟周旋 愛妓峰、カンファ戦跡旅行	
1979	7	11	防衛協議会	
1979	9	17	民防衛教育	



『昌平日記』の崔乃宇も、いろいろな反共教育を受けた。南派スパイの講演、映画観賞などがあったほか、「対共団体」の結団式の後、前方師団、トンネル、臨津閣、板門店、ソウルの国会議事堂と国立墓地、牙山の顕忠祠をめぐる反共旅行に出かけた。しかし、かれにとって2日間の旅行は、提供される食事は貧相で、1杯飲むこともできないつまらないものであった。また、最前線のトンネルでは、「同族同士で鉄条網を張っておいて国境線とは嘆かわしかった<sup>86)</sup>」と書いている。

1950年代以降、反共主義が社会的な感性として根づいていくなかで、対国民宣伝の一環として反共教育がおこなわれた。1950～60年代の反共教育は、初等学校の子供を対象にした感情教育が中心だったが、70年代はじめのデタントと南北和解のムードのなかで、反共教育は再検討されるようになった。それまでの反共教育が感情にかたよった断片的・皮相的な批判だったという問題が提起され、その対案として、「知共／勝共を強調する教育」、「実話や体験談を通じた教育」が提示された<sup>87)</sup>。とりわけ実話は、なまなましさやリアルさのある「触覚的感性」を伝えるすぐれたプロパガンダの機制であり、直接体験は、北朝鮮との対面接触という局面において、実話としてみなおされた<sup>88)</sup>。

それでは、冷戦の恐怖のなかで、その恐怖の実体として迫ってくる北朝鮮を相手どった反共は、国民にどのように認識され、どのような結果を生んだのだろうか。メディアが提供する北朝鮮によるさまざまな挑発の事例と、とくに1972年の7・4南北共同声明に触発された南北の対話・接触の局面がどのように反共のおもな機制になったのかを、日記を通じてうかがい知ることができる。これにかんする内容をもっとも多く記したのは、やはり『朴來昱日記』であった。表4は、それを整理したものである。当時メディ

---

<sup>86)</sup> 『昌平日記』1976年4月23日。

<sup>87)</sup> 이하나、前掲論文、530～535頁。

<sup>88)</sup> 이하나、前掲論文、538頁。

表4 『朴來昱日記』のスパイ、北朝鮮挑発事件および南北関係に関する記録（1969-1979）

年	月	日	日記の内容	備考
1969	2	13	高等スパイ李穂根逮捕（偽装スパイ）	真実和解委真相明決定（人権侵害）
1969	4	15	東海〔日本での名称は日本海〕上空を偵察中の米軍EC121機を北傀 MG 機が撃墜	
1969	5	17	金圭南（共和党国会議員）をふくむ日本と欧州を拠点とする大規模スパイ団事件	真実和解委真相明決定（人権侵害）
1970	6	6	韓国海軍放送船1隻拉北	
1970	6	23	銅雀洞国立墓地の爆破をもくろむ武装共匪浸透（1名爆死、残党追撃）	
1970	6	29	京畿道君子湾に浸透した快速スパイ船1隻拿捕	
1971	1	24	KAL F27旅客機機長、拉北未遂（副機長爆死）	
1971	2	6	日本札幌冬季オリンピック、北傀スケート選手ハン・ピルファと姉のハン・ケファの面会推進（北傀の妨害予想）	電話通話／1990年札幌冬季オリンピックで韓弼花 - 韓弼聖兄妹面会
1972	2	28	米国ニクソン大統領、中共訪問後帰国、27日米中共同声明を発表（平和共存原則）	
1972	3	25	北傀固定スパイ、21名検挙（17年間長期潜伏活動）	
1972	5	21	米国ニクソン大統領、ソ連訪問（22～30日）	
1972	6	18	南北赤十字、第20次予備会談（合意文書交換）	
1972	7	4	南北共同声明発表（李厚洛情報部長、北朝鮮訪問 - 朴成哲 北朝鮮第2副首相、韓国訪問）	
1972	8	29	韓国赤十字代表団、平壤到着（断絶27年以来、第1歩）	
1972	9	12	北朝鮮代表団、ソウル訪問	
1972	10	12	南北調節委員会、第1次会議 - 一千万離散家族搜索	
1972	10	23	第3次南北赤十字会談のため韓国側代表団、2度目の平壤訪問	
1972	11	7	南北第2次共同委員会の共同発表文と声明書	
1972	11	25	南北調節委員会発足のため、北朝鮮代表団（朴成哲ら）ソウル訪問	
1973	5	11	第6次南北赤十字会談のため、北側代表団ソウル訪問	
1973	6	3	重化学工業拠点スパイ団検挙（浦項製鉄記述担当理事、韓国火薬理事、ソウル工大教授ふくむ）	

年	月	日	日記の内容	備考
1973	6	13	南北調節委員会会議のため、北朝鮮代表ソウル訪問	
1973	6	24	朴正熙大統領、平和統一外交政策声明を発表（南北の内政不干渉、不可侵の提議、北朝鮮国家の不承認）	
1973	6	29	スパイ、スパイ、またスパイ事件（5・15済州島牛島スパイ団／6・6日本拠点合作闘争仮装軍部浸透事件／6・22高麗大生中心学園浸透スパイ団／6・26炭鉱地帯中心女スパイ団／6・28企業幹部を含む在米僑胞地下網組織／6・30忠南地方拠点統一革命党再建スパイ団）	
1973	12	3	北朝鮮艦船、領海侵犯（43回海上挑発）	
1974	2	21	白翎島近海で韓国漁船拿捕（スパイ船だと北朝鮮主張） - 汎国民的蹶起大会、全国で開催	
1974	2	25	拉北漁師送還、北傀糾弾蹶起大会 光州で反共連盟 全南支部主催で開催	
1974	3	15	鬱陵島拠点スパイ団、47名検挙	2016. 11 被害者5名41年ぶりに無罪確定
1974	7	21	北傀武装スパイ船撃破 曳行中	
1974	8	15	朴正熙大統領狙撃さる、陸英修女史狙撃され死亡 - 在日朝鮮人、朝鮮総聯の文世光速捕	
1974	11	5	日本拠点スパイ団、18名検挙（民団幹部主動）	
1974	11	16	北傀軍、非武装地帯軍事分界線の南側に接近 不法の地下トンネル構築発見	
1975	7	5	光州周辺に武装共匪2名出現 - 1名射殺、1名追撃中	
1976	2	6	1951～1975年の25年間 南派スパイ3,910名、治安当局発表	
1976	6	20	中東部戦線、わが軍地域浸透3人組、北傀武装共匪、全員射殺	
1976	8	18	米軍将校2名殺害さる、北傀軍30名板門店で蛮行（板門店ポブラ事件）	
1977	7	14	米軍ヘリコプター、北傀領空飛行、撃墜（米軍3名死亡）	
1978	4	21	カーター米国大統領、駐韓米軍撤収計画を発表	
1978	11	6	北傀第3トンネル糾弾大会（汝矣島広場200万人、光州も20万人以上集まり、蹶起大会）	
1979	4	20	統一革命党再建をもくろむスパイ団、9名検挙	

アを通じて発表されたスパイおよび南北関係にかんする事件のすべてが日記に記録されたわけではない。作者がどういう基準で記録するか否かを決定したのかは不明だが、記事の量が多かったもの、自分の生活や考えに相当な衝撃や影響をもたらすだろうと判断した事件だったのではないだろうか。

1968年の新年早々から韓国社会を震撼させた1・21武装共匪青瓦台襲撃事件と11月の蔚珍三陟武装共匪浸透事件（別名、<sup>イスンボク</sup>李承福事件）によって、北朝鮮への恐怖と敵対心が高まったが、これは69年以降も、さまざまなスパイ事件と北朝鮮の挑発などによってひろまった。1969年2月の「偽装スパイ<sup>イスンゲン</sup>李穂根事件」は「天人ともに怒る手口」で、北朝鮮への警戒心をいっそう強める雰囲気醸成した<sup>89</sup>。これは、『牙浦日記』でも唯一の時局事件に対する言及で、法で処罰するのをもったいないからソウルの街角で公開処刑にしてやるべきだ、と敵意をあらわしている<sup>90</sup>。さらに、ヨーロッパや日本を拠点にした留学生スパイ団事件もあいついで発表された。この事件には国会議員と留学生がふくまれていたのだが、これについて、「あいつを食わしてやったわたしの税金が」もったいないと興奮し、留学生がふくまれていたことについては、「国家から恩恵をたくさん受けた奴らがあ

---

<sup>89</sup>「高等スパイ李穂根逮捕、カンボジアに行こうとして、サイゴンで。1967年3月22日、板門店軍事停戦委を通じて劇的に脱出したときはみんなおどろいた……次官級……67. 10. 4 歓迎市民大会……最大のデラックス待遇……工作がむずかしくなるから第3国を通して行こうと、かつらで扮装し、1月27日に韓国を発ち、カンボジアに行こうとしてサイゴンで逮捕された高等スパイ……天人ともに怒る手口」（『朴來昱日記』1969年2月13日）。

<sup>90</sup>「以北通信の副社長だった李穂根と、1967年に板門店会談で、米軍将校のセダンで以南に脱出し、自由のふところに帰ってきて国民からあたたかい歓迎を受け、住宅まで準備してやり、友石大学に勤務する講師の李江月女史と結婚までし、各都市で反共講演会をやり、全国的に反共について努力もたくさんしたが、69年2月16日、金浦空港を無事に出発してサイゴンまで脱出したのだが、以北へ脱出しようと輸送機に来ようとしたのだが、韓国情報部がつかまえ、緊急押送してきた。李穂根は法で処罰してやらす、ソウルの通りに出してきて市民から処罰を受けるようにするべきだ」（『牙浦日記』1969年2月末のメモ）。

んなふうなのだから、天罰を受けて当然だ」と怒った<sup>91</sup>。表4に記録された事件だけみても、1970年代にメディアを通じて発表されたスパイおよび北朝鮮挑発事件は、「忘れたと思ったらまたおきる」もので、忘れたり油断したりすることのできない北朝鮮の実体を国民にみせつけ、反共は生存の武器になった。

一方1970年代は、世界的に冷戦のカーテンがとり払われるデタントの時代がはじまったが、75年のベトナム戦争の終結とベトナムの統一は、いまや朝鮮半島が地球上でほぼ唯一冷戦の産物である分断体制が残っているという恐怖心を育てた。とりわけベトナム戦争は、ベトミンという共産主義体制の勝利に終わったため、韓国社会の緊張感と恐怖はいっそう大きくなった<sup>92</sup>。

他方で朴正熙政権は、国民には冷戦と北朝鮮に対する恐怖を煽り立てるものの、世界的に拡大するデタントの雰囲気を見無視することはできなかった。1971年の大統領選挙で金大中候補の外交・安保関連の公約にあらわれた南北の平和統一と安全保障というテーマは、けっして無視しえないがれになった。恐怖と暴力的な抑圧だけでこれ以上国民の耳と口をふさぐこ

---

<sup>91</sup>『朴來昱日記』1969年5月17日。この事件の核心人物である金圭南（キムギョナム 現職共和党全国区議員）と・朴櫓洙（パクノソ）は、再審中の1969年7月13日に死刑が執行された。2008年、この事件について、「真実和解のための過去事整理委員会」は調査開始の決定をくだし、その結果、不法拘禁、過酷行為、自白によるでっちあげがあり、国家機密漏洩・探知などのスパイ行為の事実を認定する証拠が微弱だと結論をくだした（진실화해위원회 2009년 하반기 조사보고서 ‘박노수·김규남 등 유림간첩단 사건’）。

<sup>92</sup>「インドシナ戦が共産主義の勝利に終わった原因は、中共がすみやかに軍事援助を絶対的にしたため、とくに新式兵器はそうで、アメリカはインドシナ戦にまったく手を出さなかった。パリ・ベトナム協定は白紙になり、その間共産主義たちは整備、中共から大量に武器援助を受けた……朝鮮半島はアメリカが手を放せば、陸路で支給されるソ連中共の武器によってすぐにでも南侵してくることはあきらかだ。とくに最近のように事態が急変しているだけに、朝鮮半島3500万の民は緊張した状態だ。すぐにでも戦争がおこるような不安感のなかにいるのだ」（『朴來昱日記』1975年4月20日）。

とはできなかつたし、民主主義への要求も、朴正熙政権の長期執権を不可能にした。これを突破するため、朴正熙政権は南北間の対話と平和統一というカードをきった。1972年、びっくりショーのように南北の最高位権力の側近が南北を行き来し、朴正熙 - 金日成に会い、両者の合意によって、「7・4南北共同声明」が発表されたのである。

『朴來昱日記』は、1972年7月4日に、南北共同声明の全文をそのまま書き写している。その後もかれは、南北対話局面について、メディアの報道をスクラップまでしながら、ことこまかに日記に記録している。

#### 「南北平和統一、実利で合意

民族の念願、分断27年ぶりに南北赤十字社の双方代表が開城、板門店で会談 共同監視区域内のひとつのテーブルでむかいあい、人道的平和を議論 南北離散家族の搜索運動を展開している一方、今回、中央情報部長が随行員3名をつれて平壤を直接訪問 金日成と2回会談をおこない、北朝鮮の実権第2人者である金日成の実弟・<sup>キムヨンジュ</sup>金英柱組織部長、尽きない議論をした上、金の代理で、朴成哲・北朝鮮第2副首相と随行員4名が、5月29日から6月1日までソウルを訪問、朴大統領と直接面談し、民族統一問題を協議したと。極秘に付された後、本日午前10時、記者会見をおこない発表した。双方は、祖国の平和統一を1日も早くなさなければならないという共通の念願をいだき、虚心坦懐に意見を交換し、たがいの理解を増進するのに大きな成果を得たと語った。」

（『朴來昱日記』1972年7月4日）

かれの日記では、南北赤十字会談を通じた南北離散家族の搜索と、相互訪問を通じた北朝鮮の住民の生活をうかがい知る機会になったこと、戦争の恐怖をこえて平和がなされるかもしれないという希望をいただいたことな

どが表現されている<sup>93</sup>。だが、このような南北間の対話局面が、反共主義を弱めるよりむしろ強める機制として活用された。「人道主義」をうたう南北赤十字会議でみられた北朝鮮代表のつかかってくるような政治的発言と態度<sup>94</sup>、さらには民族の英雄と称される李舜臣將軍の霊前でも傲慢な態度をみせた「没常識的で不従順な」北朝鮮代表は、醜悪な共産主義の表象そのものであった<sup>95</sup>。

<sup>93</sup>「新聞を読んでみる。ラジオのボリュームを調節してきく。TV画面を正しくあわせて観る。もうすこし具体的に、もうすこし正確に、もうすこし社会の底と隅を、そして実生活をみて、新聞のすみずみまで、こまかい文字を、なにをするでもなく読む。これが血は水より濃いという同族であり、兄弟のあいだの友情でなくてなんであろう……そして、断絶27年間で変遷してきた文化・経済・政治を知ろうと。とにかく、いままで南北赤十字会談の成果は、南北統一の日進月歩だといおう。こぶし大の活字とこまかい字で新聞8面をぎっしり埋めた記事、いそがしい足をとめて読んでいくが、にっこり笑う市民たちの期待と願いがほんとうにかなうのだろうか」（『朴來昱日記』1972年9月2日）。

<sup>94</sup>「今日、南北赤十字代表会議がソウルで開かれたのだが、中継放送をきくと、わが南韓代表の祝辞や挨拶は、すべて赤十字精神にもとづいて政治宣伝なくスマートにこなしたが、北側代表の祝辞や挨拶、演説は、すべてが政治宣伝で、きくにたえない言葉ばかりくりかえす。全然有益ではない発言だった」（『大谷日記』1972年9月13日）；「最近のソウルでの第2次赤十字会談に北側代表・随行人・記者54人が来て会議中で、市内でも名勝地でも、観光車両をくまなく調べている。ところが、会議中も、言葉のはしばしで金日成を首領うんぬん、教示がああだこうだと政治色の濃い発言に、5000万の民がわれわれ国民に失望をいだかせた。純粋な人道主義的立場から、南北に散らばった1000万人の離散家族をさがそうという目的で開かれたこの会談を政治的に利用するのだから、1000万の失郷民は、どんなに北の空をみあげてまた望郷の思いに駆られるだろうか。それだけじゃない。北朝鮮の労働新聞その他の報道新聞も、赤十字会談のなまなましい報道はまったくなく、たとえば12日に北側代表が入境したときの北朝鮮の人びとの態度、そして1000万離散家族をさがしてやれという人道主義がありがたくて、かれらが入ってくる沿道に多くの群衆が出てきて手を振ってやったのだが、かれらは共産主義と金日成を慕って歓迎するのだと誤報を流しているし、ソウルを観光した所感を質問すると、ちぐはぐな答えをしたり始終きこえないふりをしたりしているから、みても感じてみずからの感情どおりに話せないのが共産主義なのだ」（『朴來昱日記』1972年9月14日）。

<sup>95</sup>「12日に来たときより、帰るときの沿道に群衆の姿がなかった。これはかれらが会議中に妄言をくりかえしてわれわれ国民に失望をもたらしたからだし、顯忠祠参拝のさい、李舜臣將軍の霊前でみんなで黙祷しましょうという案内嬢の音頭があったのに、北側代表団長の金泰熙なる者は、かたまつたまま頭をたれず、諮問委員代表のユン・ギ？〔原文ママ〕。

「7・4南北共同声明」のもとでの南北の対話局面は、結局のところ、国内的に「平和統一という民族の念願を具現する」という名目のもと、維新体制の成立へと進んでいった。その後、北朝鮮との対話はしばらくつづいたが、1973年に6・23特別宣言<sup>96</sup>が発表され、北朝鮮の反共法廃止・駐韓米軍の撤収といった内政干渉を拒否し、対外的に国連に同時加盟するというカードが提示された。これに対して北朝鮮は、8月28日の声明で金大中拉致事件に言及し、国家保安法による弾圧、6・23宣言は「ふたつの韓国」を画策するものだと非難したが、韓国政府もこれに反駁で対応し、それまで進んできた南北間の対話局面は中断してしまった。

1974年以降、表4のように、スパイおよび北朝鮮の挑発事件はあいついだ。もちろん強圧によってでっちあげられた事件もあったが、当時の国民にはそのことを判断する余地はなく、1974年の8・15記念行事の場で、在日朝鮮人<sup>ムンセグワン</sup>文世光の銃弾によって、大統領夫人<sup>ユクヨンス</sup>陸英修が殺害される事件がおきた。1976年には、板門店で北朝鮮の兵士たちが斧で米軍兵士を惨殺する事件がおき、また北朝鮮のトンネルが発見されるなど、70年代後半も南北間の対決と緊張は深まったが、南北の政権は、そのような局面を、それぞれの独裁権力の構築と永久執権化に活用した。国民は拉北漁師の送還、トンネルの糾弾などの大規模な反共集会に動員され、「反共国民」であることを確認しなければならなかった。

---

尹基福]なる者は、レーニン帽を堂々とかぶって黒い眼鏡をかけ、ただながめていたようだ。将軍は、李朝の先祖のころに活躍した世界的な英雄であり、聖雄李舜臣将軍、そして南北のなかった27年前、数百年前の将軍であり、この国の三千里山河のため、2000万のこの民族のために戦われた名将の霊前であんなにも不敬なのだから、天罰を受けるべき品性だ、とにかく、ねばりづよい忍耐力をもって幼い息子をあやすように会談にのぞまなければならない。実際、われわれが多く譲歩しすぎる」(『朴來昱日記』1972年9月16日)。

<sup>96</sup>『東亜日報』1973.6.23. '평화통일 외교정책에 관한 대통령 특별성명'. 朴正熙はこの声明を通じて、北朝鮮の侵略的な挑発行為・赤化革命誘発の画策の即刻中止、相互誹謗・内情スパイの中止、北朝鮮の国際機構参与の黙認、南北韓の国連同時加入の黙認などを提示した。ただ、国連同時加入は北朝鮮を国家と認定することではないと明言した。



1970年代の朝鮮半島をめぐる周辺情勢は、アメリカと中国の「ピンポン外交」を通じた修交、ベトナム戦争の終結によるアメリカの東南アジアからの撤収、アメリカのカーター政府の樹立と駐韓米軍の撤収の主張などにより、冷戦体制に変化がおこっていた。だがこのような状況は、冷戦-分断の最前線である南北韓を、「平和統一」よりも体制競争と政権安保のイニシアティブをつかむためのチキン・ゲームへと追いこんだ。その渦中で、南北韓の大衆は、「反共国民」あるいは「主体人民」として、自分を確立させなければならなかった。維新体制は「反共国民」を基盤にしていたが、それを下支えしたのは、「漢江の奇跡」という経済成長の果実であった。1世代もすぎていない過去にあじわっていたひもじさと戦争の恐怖は、維新体制において反共国民として生きていくことに耐えさせた。

## 5. おわりに

『大谷日記』、『昌平日記』、『朴來昱日記』、『牙浦日記』。4冊の日記につづられた1970年代の韓国社会をみてきた。本稿では、かれらの1日1日の日常生活より、4人全員をとりまいていた当時の大韓民国の政治状況に焦点を当てた。7・4南北共同声明の発表、維新憲法の公布などは、大韓民国に住む国民全員にとって当時の共通の事件だったが、日記を書いた4人をふくむ国民それぞれにとっては、その重みと意味が異なっていた。日記はそのことを示している。相反する異なる声をききたかったが、意外にも、「何もいわなかった」という沈黙が流れていた。無関心なのか回避なのかかわからない沈黙の一方で、政治評論家よろしくことごとく自分の意見を開陳する熱血国民の姿にも出くわした。

冷徹な理性と論理によって分析しては理解しがたい凡百の「張三李四」たちの感性と経験を読み、それが現在の韓国社会の軌跡をつくった者たちなのだということもあきらかになった。依然として冷戦の刻印がその

まま残っている朝鮮半島において、大韓民国は反共保守国家というアイデンティティをもっている。1960年代から本格化した経済成長は、その時代の認識のもっとも強力な基準であり指標であった。貧しさからの脱皮は、この時期の国民みな目標であり希望であった。一方で、経済成長の成果が農村より都市に、特定地域に集中する現実をみて、それについて不平をもらし、あやまりを指摘している。しかし、それは実務的な領域における不足だけで、「指導者の領導」は正しい方向だという声が大きくなっている。そこでは共産主義、北朝鮮という外部の脅威は、こうした不満と憂慮を寝かしつけることができる「如意棒」のようなものであった。

メディアを通じて伝えられる北朝鮮のあいつぐ無慈悲な挑発は、実体的な恐怖として国民に迫ってきた。それが本当に事実なのかどうか、あるいはその脈絡はどうかを把握することができるような情報は十分ではなかった。メディアは、かれらの感性的な経験を事実化、イデオロギー化する役割を担った。さらに、郷土予備軍、民防衛、反共教育、体験活動などは、冷戦体制下の国家安保のための義務的な活動として宣伝・施行され、これを拒否することは「非国民」あるいは「アカ」という内部の敵とみなされるような状況であった。

本稿でみた日記の4人の作者たちにとって、激烈な経験でありトラウマだったのは、民族差別の植民地経験より、解放後の戦争と貧困であった。朝鮮戦争のなかで、イデオロギー対立によって家族と周囲の知人たちをうしなった原初的な怒りとかなしみ、戦争の物理的な暴力が生活の土台を破壊させることによってもたらされた極限の貧困もあじわった。このような状況は、感性的な「反国民」として自然発火して、経済開発と成長という価値を優先し、政治的な独裁体制はそのための必要悪だと考える「受動的合意」を可能にしたのだと思われる。

日記は、個人の記録であるだけに、公的領域でおきる事件や主張について、代表性をもつことはない。したがって、本稿でみた日記が1970年代の

韓国民の政治意識を代表するものだということにはならないが、多様な地域と階層に属していた匹夫たちのなまなましい声をきくことは、政権広告用資料や合理的な理性と理論によって投影して歴史をみる研究者たちの隙間を埋めるのに有用なテキストになると考える。また、日記の作者たちは現在を生きる同時代の人間であり、大韓民国の政治的主体の一員である。かれらに変奏する歴史は、いまでも現在進行形である。

## 参考文献

### ○史料

『경향신문』、『東亜日報』

신권식 『평택일기로 본 농촌생활사Ⅰ : 평택 대곡일기 (1959~1973)』; 『평택일기로 본 농촌생활사Ⅱ : 평택 대곡일기 (1974~1990)』; 『평택일기로 본 농촌생활사Ⅲ : 평택 대곡일기 (1991~2005)』 경기문화재단 (사) 지역문화연구소.

최내우 『창평일기1』; 『창평일기2』; 『창평일기3』; 『창평일기4』 지식과교양, 2012.

권순덕 『아포일기1』; 『아포일기2』; 『아포일기3』; 『아포일기4』; 『아포일기5』 이정덕 · 소순렬 · 남춘호 · 문만용 · 안승택 · 송기동 · 진양명숙 · 이성호 편, 전북대학교 출판문화원, 2014.

<박래옥일기> e-자료 (한국연구재단 기초학문자료센터)

### ○著書·論文

전재호 『반동적 근대주의자 박정희』 책세상, 2000.

임지현 · 권혁범 외 『우리안의 파시즘』 삼인, 2000.

데레레프 포이케르트 지음, 김학이 옮김 『나치시대의 일상사 : 순응, 저항, 인종주의』 개마고원, 2003.

이병천 『개발독재와 박정희시대 : 우리시대의 정치경제적 기원』 창비, 2003.

임지현 · 김용구 편 『대중독재론 : 강제와 동의 사이에서』 책세상, 2004.

최명림 조사 집필 『기억, 기록, 인생이야기』 국립민속박물관, 2008.

서중석 『대한민국 선거이야기』 역사비평사, 2008.

西川祐子 『日記をつづるといふこと—国民教育装置とその逸脱』 吉川弘文館, 2009年.

조희연 『동원된 근대화 : 박정희 개발동원체제의 정치사회적 이중성』 후마니타스, 2010.

이정덕 · 안승택 편저 『동아시아 일기 연구와 근대의 재구성』 논형, 2014.

이정덕 외 저 『압축근대와 농촌사회 : 창평일기속의 삶 · 지역 · 국가』 전북대학교 출판문화원, 2014.

기외르기 스텔, 크리스토프 폴만, 김동춘, 박태균 외 『반공의 시대 : 한국과 독일, 냉전의 정치』 돌베개, 2015.

김혜진 「박정희정권기 반공이데올로기의 정치경제적 기능」 『역사비평』 16, 1992.

김정훈 · 조희연 「지배담론으로서의 반공주의와 그 변화 : 반공규율사회의 변화를 중심으로」 『한국의 정치사회적 지배담론과 민주주의 동학』 함께읽는책, 2003.

신병식 「박정희시대의 일상생활과 군사주의」 『경제와 사회』 72, 2006.

원보영 「『한약사 박래옥일기』로 본 20세기 후반의 민간 의료생활」 『민속학연구』 25, 2009.

- 황병주 「유신체제의 대중인식과 동원담론」 『상허학보』 32, 2011.
- 강정인 「박정희 대통령의 민주주의 담론 분석 : “행정적” · “민족적” · “한국적” 민주주의를 중심으로」 『철학논집』 27, 2011.
- 후지이 다케시 「4·19/5·16 시기 반공체제 재편과 그 논리 : 반공법의 등장과 그 담지자들」 『역사문제연구』 25, 2011.
- 강정인 「박정희 대통령의 민족주의 담론 : 민족과 국가의 강고한 결합에 기초한 반공 · 근대화 민족주의 담론」 『사회과학연구』 20(2), 2012.
- 강정인 · 하상복 「박정희의 정치사상 : 반자유주의적 근대화 보수주의」 『현대정치연구』 5(1), 2012.
- 김지형 「1960~70년대 박정희 통치이념의 변용과 지속」 『민주주의와 인권』 13(2), 2013.
- 배성인 「유신체제의 지배이데올로기와 대중 통제」 『유신을 말하다』 나람북스, 2013.
- 김영미 「『평택 대곡일기』를 통해서 본 1960~70년대 초 농촌마을의 공론장, 동회와 마실방」 『한국사연구』 161, 2013.
- 니시카와 유키 「근대에 일기를 쓴다는 것의 의미」 『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』 소명출판, 2014.
- 이하나 「유신체제 성립기 ‘반공’ 논리의 변호와 냉전의 감각」 『역사문제연구』 32, 2014.
- 김영미 「어느 농민의 생활세계와 유신체제」 『한국근현대사연구』 63, 2015.
- 안승택 「농민의 풍우 인식에 나타나는 지식의 혼종성 : 『평택 대곡일기』 (1959~1979)를 중심으로」 『비교문화연구』 21(2), 2015.
- 허은 「동아시아 냉전의 연쇄와 박정희정부의 ‘대공새마을’ 건설」 『역사비평』 111, 2015.

はらゆうすけ  
(原佑介 訳)